

この姫君に純愛を！

あぶらーげ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

魔王討伐後のアフターストーリー

カズマは自堕落な生活を送っていた。しかし、突如王都から届いた一通の手紙に衝撃の事実が…。

それは他国の王子とアイリスの結婚が決まったという知らせだった。

物語が進むたびにカズマのアイリスへの想いは妹へものから変わっていく。

アイリスメインヒロインのストーリー。

タグは随時追加していきます。

# 目次

一通の手紙	1
姫君の本心	12
王女はおてんば	24
出発と休息	38
番外編 甘いチョコは夢の味	53
俺と姫の変化	74
アイ × ト × コイ	89
乱入	105
激闘?	120
リメンバーミー	128
真夜中を超えて…	137
君に決めた!!	147

絶望のその先で



# 一通の手紙

魔王討伐から数か月後、俺たちは世に言う「英雄」になっていた……………

まあ、だからと言って特に何か変わったことなんてあまり無い。

確かに王都でのパーティーとかは行われて称賛やら賞金を受つとたけど、もともと金には困っていないのでどうということはない。

あとは、魔王軍はいなくなつたし、金はたんまりあるのでわざわざクエストに行くこともなく自堕落な生活を送っていた。

相変わらずアクアは俺に次ぐニートな生活を過ごしているし。

めぐみんの一昨日一爆裂やクリスとの神器集めなど、平和な日常が続いていた。

最後の一つについては平和って言っているのか……………？

だがそんな俺の平和も、たった一通の手紙で簡単に吹き飛んでつた……………。

「カズマ、カズマ！大変だ！」

「おう、そんなに慌ててどうしたダクネス？ トイレが近いのか？」

「んんっ……!? くっ……! って今はふざけている場合ではないんだ！」

「……それで何かあったのか？」

「ああ、つい先ほど王都からダクティネス家を通して私たちに送られてきた手紙を受け取ったのだが……どうやらアイリス様が前回とはまた別の国の王子との婚約を交わしたので、近日その国での結婚式を挙げるそうだ。そこで、その道中警護として私たちに国から勅命が下った」

「……こいつ、今ナンテイツタ？」

「はあ!? お前、今なんて言った!? ア、アイリスが結婚だって!? で、でも前は魔王軍侵攻への支援金の要請として仕方なくだろ!? もう魔王もいないのになんで今更俺のかわいい妹がどこぞの馬の骨に嫁入りしなくちゃなんないんだよ！」

「バカ者！ 毎回言ってるが、いつアイリス様がお前の妹などになったんだ!……まあいい、それで、なぜかと言うとだな、ここらの国は魔王軍という共通の敵がいたからこそ皆が協力をして一丸となっていた。内側で揉め事などしていたら共倒れだから」「つまり、魔王がいなくなったから今はその心配がないと?」

「ああそうだ、今頃各国は軍事力の増強を最優先にしているらしい。唯一、エルロードだけは友好的なままだが。……そもそも大きな原因は魔王軍が占領していた土地をどう分配するか……ということらしい。確かに魔王を討伐したのは私たち、もといベルゼルグだが、それも周辺国からの支援金無しには成しえなかったからな。……こうして所有権の奪い合いになっているわけだ」

「だいたいゲームならラスボスを倒したらハッピーエンドのなるのに、それどころか今度は泥沼なのか。」

「ここしばらくは浮かれていたが、この世界はそんな甘っちょろいものではなく、本当に世知辛いものなのだ……ということを思い出した。」

「理由は分かった……だけど、それと結婚に関係なんてあるのか?」

「大ありだ!! 貴様は本当に何も分かってないのだな。事態の改善には国と国の同盟が一番だ。そして同盟にはその証として両者の王族を結婚させ血縁者になるという手段がよくとられるのだ」

「確かに……三〇無双とかでは敵と戦争したくなかったら同盟を結ぶのが手っ取り早かったしな。」

「……だけど……それってつまり、政略結婚……っていう事だよな。」

「ふざけんな! 一体アイリスをなんだと思つてやがるんだ!」

何かいい手は無いか……!」

「……よし、わかった。今すぐ俺が【潜伏】で城に忍び込んであっちの王子の寝首を……」

クリスとの神器集めでそういうスキルも一通り身につけているから不可能ではないと思う……たぶん。

「バカ! お前は今すぐに戦争を起こすつもりか!?!……私だつてアイリス様の事を考えると、反対したいカズマの気持ちもよく理解しているつもりだ。……しかし、これはもう……しかたが……ないんだ」

「……でもこの国はあの魔王軍と戦った国だろ? 怪物達と比べたらたかが人間に攻められたつてどうつてことはないだろ」

俺がそう言うつと、ダクネスは首を無言で振り……。

「我が国は魔王軍の領土に唯一面していた。つまり、その他の国々に囲まれているつことだ。さらに屈強な冒険者達はその多くがそれぞれ祖国へと帰つていった。……よつて、現在のベルゼルグは以前ほどの力を持っていないのだ。もし今、他国同士で同盟を結び、この国に攻め込まれたら……この国に、もはや抗う力は……無い」

「だからそうなら無い前に、この国も今すぐ強力な国と同盟を結んで身を守ろうつて……ことか?」



「……そうだ」

確かに理にはかなっている。

王女は同盟にうってつけだと言うことも……。

……王女と……結婚?!

……何かを忘れてる気がする……!!

「……おいまてよ! 確か魔王を倒した勇者には、王女と結婚できる権利があつたんじやないのか? い、いや、別にアイリスと結婚したいわけじやないからな! やめろよ! 俺に人間のクズを見るような目を向けないでくれ! 違うから!

俺はただ兄として妹の心配をしているだけだから!」

そう、俺はアイリスを性的に見るようなことは決してしない!

だってアイリスは正統派の妹枠だからな。

YES 妹! NO タッチ!……だ。

「確かに、お前にはその権利があつたんだが………魔王討伐記念パーティーのときに、クレア殿にその必要は無いと私から言っておいた」

お前と白スーツの仕業かよ!

あいつなら笑顔でその提案を即座に受け入れそうだ。

「お!ま!え!なにしてくれてんだ!! このDMクルセイダー!! ふつつつぎけん

よ！　なに勝手に人が苦勞して手に入れた特權を捨ててくれてんだ！」

「わつ、私はお前のことを思ってたな！　　そつ、それに、相手がアイリス様だと私も立場上カズマを取り合うわけには……／＼／＼／＼（ぼそぼそ）」

「ぼそぼそ言ってるけど【読唇術スキル】で全部筒抜けなんだよ。」

「まったく、俺を独占したいんだつたらそういえよな！……ララティーナ」

「ラツ、ララティーナって呼ぶな／＼／＼！　　つっ！　　もつ、もういいだろう！　　それで、本題に入るがこの依頼を受けるのか？」

「……はあ、分かった。今回ばかりは俺がなにをしても、どうにもならねえしな。とりあえずさつきさんの計画はまだ腹のうちに留めておく………ん？　　そういえば、今回は反対しないのか？　　お前のことだからつきりまた俺を拘束してきたりするもんかと思っていたけど」

「前回は……その……すまなかった。でも今回はすっかりカズマを信頼しているからな！」

「お、おう。なんだか正面きつて言われると照れるな／＼／＼」

「わ、私は思っていることを言っただけだ／＼／＼」

「……………なにイチヤイチヤしてるんですか？」

「め、めぐみん!!? い、いつからそのいたんだ？」

「はい、だいたいダクネスが手紙を持ってきたという所からですかね」

「それ最初からじゃねえかつ! ってそうだった、アイリスの護衛の件だけど、めぐみんも聞いたから分かつてるだろうけどいくよな？」

「そうですね。ライバルも一人減ることですし、下っ端が寿退社するのを祝ってあげるのも長の役目です。そういうわけで私は賛成です」

「というかまだこいつらは変な集まりをやってるのか……………」

「お前たちのごっこ遊びはいつから会社になったんだよ!」

「失敬な! れっきとした盗賊団ですよ! もう少しすればたちまちベルゼルグ随一の盗賊団にしてみせます!」

「言ってるそばから人数減ったけどなその人数じゃ部活動にすらならないな」

「ブカツドウとはどのようなものか知りませんがとても馬鹿にされたのはわかりません。わかりました! では今夜の獲物はカズマのベットの下に隠されているエ」  
「分かっただ、俺が悪かった! だから許してくださいめぐみん様!」

「分かればいいんですよ。私も少し大人気なかつたですし」

「……ロリ枠が……」

「おい！今私のどこを見てそう言ったのか聞かせてもらおうじゃないか!!」

「……いい加減にしないかお前たち！これではいつこうに話が進まん！」

「わ、悪かったよ。めぐみんもごめんな、悪乗りが過ぎた」

「……まったく、次からは気をつけてくださいね」

「それでは話もまとまったことだ、王都に出向く準備をするぞ」

「分かりました。私はアクアを呼んできますね」

「ああ、頼むぞ。？……そういえば、カズマ。アクアには了承を得なくていいのか？」

「別にいいだろ。王都に行けばうまいもんがあるとも言えば勝手に付いてくるだろ」

「……私も言えた義理ではないが……カズマは随分とアクアの扱いが雑だな……」

「そうよ！ カズマさんも皆も私をぞんざいに扱いすぎなんじゃないの？私そんなに悪いことしてないのに！」

……また空気の読めないタイミングで来やがって。

「アクア！ 王都に行くぞ！ あつちに着いたらなんかうまいもん奢ってやる」

「えっ、美味しいもの!? わかったわ。今すぐ準備してくるわね!」

「……なっ、ダクネス。こういうやつなんだよ」

「………なんというか………それでいいのか………アクア」

「まあそういうことだ、それじゃあすぐに行くぞ。つと、その前に……ダクネス、俺は装備を整えにウイズの店に行ってくる」

「分かった、ではレポート屋で合流しよう」

「………了解」

最近は冒険に行くことも滅多にないし、思いつく限りの発明品の案も全部売っちゃまったからなあ、あの店に行くのも久々だな。

………? ……そういえば、ダクネスは国からの勅命って言ったな、前はアイリスからの依頼だったのになんで国から直接なんだ?

それに、思えば俺ってアイリスにはどんな感情を向けているんだ? 兄弟愛か?

でも、こここのところますます魅力的になったというか、小悪魔的というか………つて、おおい！ これじゃ俺がアイリスを女として見てるみたいだろ！

落ち着け！ 俺はロリコンじゃありませんよ。……でも、なんかムズムズするな

………ああ！ クソツ！

いろいろ悩んでたらしいの間にか目的地に到着していた。

………考えても仕方がないし、取りあえず買い物をするか……

カランツ！ カランツ！

「ウイズー？ 久しぶりに来たぞー」

「へいらっしやい！ 最近女たちに囲まれ調子に乗りあわや王女にまで色目を使い始めた男よ！ 丁度良いところに来たな！」

………コ、コイツもいるんだったあ……



## 姫君の本心

カズマ達へ手紙が届く数か月前……

王城

「アイリス様……やはり、私から王様にご進言をいたしましたでしょうか？」

「いいのよクレア、それに、これは私の王族としての責務です」

「でっ、ですがそれではアイリス様が……」

「お兄様方や国民の皆様が頑張ってくださいったおかげで私たちはようやく危機から逃れることができたのです。今度は私が皆様を守る番……。ですから、私は今回の決定に従うつもりです」

「……分かりました。では、せめてアイリス様の護衛をカズマ殿に依頼いたしまししょう。あの男ならきつと快諾してくださるでしょうし、あの魔王を討った英雄ですし皆も納得するはずです。あちらの国に行かれましたら、もう……会うのも難しくなるでしょうから」

「……ありがとうございますクレア……。でも、もうよいのです。だってこんな状



況でお兄様に会ってしまったら……せつかく固めた決心が鈍ってしまうもの……」

「アイリス様……。では、そのように手配いたします。ご夕食まではいくらもお時間がありますのでしばらくお休み下さい」

「分かりました……その、クレア？」

「どうかされましたか？」

「いえ、……あの……いつも迷惑をかけますね」

「つつ！ そのような事は全くございません！ このクレア、今まで一度たりともアイリス様のことを煩わしいなどと思つたことはありませんので。私は一生アイリス様に仕える覚悟です！」

「ありがとうございます……、でもあなたにはこの国ですべき役目があるでしょう？ 私がいなくなつた後も皆様の事を頼みましたよ」

「それはっ！………、そ、そうでした……。ではお時間になりましたらお迎えに参ります（どよーん）」

「……………はあ」

強がってはみたものの、やはりクレアには誤魔化すことができませんね…………。わかってるんです……………。

これが最善の策だということも、これ以外に方法が無いということも…………。

「民なくして国は成り立たない。そして、民を守るのは王族の責務だ」と幼少の頃から教わってきました。

だからこれは当然のことなんです……………とうぜん……………なんです。

お兄様……………本当はお兄様にとってもお会いしたいです。

もつとお兄様とお話しをしたいですし、お遊びもしたい。

おいしいお料理をご一緒に作りたいですし、冒険もしたい…………。

……………一緒にいたい…………

「……私は何を考えているのでしょうか。そんなこと、叶うはずもないのに……」

「そもそも、私はこんなにも脆かったのでしょうか？」

「思いつく原因は、たった一つだけ……」

「まったく、お兄様は罪なお方ですね（クスッ）」

「……………アイリス様……………」



「だあああ！かあああ！らあああ！ いらねえつつて言つてんだろそんなもん!!」  
ウイズの店にいたのは巨乳の美人店主ではなくカラススレイヤーのバニルさんことバニルだった。

「まあ待て、確かに言いたいことはわかるぞ小僧。だがな、我輩としてもこのポンコツ店主が仕入れてきたこれまたポンコツな商品を何とか処分しなければならんのだ」  
そのうちの一つを手にとって見てみると

「力神のポーション」 五百万エリス

「一時的に全人生で出せるすべての力を出し切るポーション、ただし、使用後は永久的に体に力が入らなくなる」

「……………ゴミじゃん、こんなのどこで仕入れてくるんだよ!」

「俺は廃品回収業者じゃねえんだよ! しかも、どれも無駄に高すぎんだろ!」

「そういうと思つてな、いつしか我輩が紅魔の小娘の将来を貴様が大きく左右すると予言したことがあつたであらう?」

「そう言えば、そんなこともあつたな」

「……………確かにあの時の予言は役にたつたな、めぐみんルートはあの時に解禁されたもん

な。

「そこでだ！ 貴様がこのガラクタどもを全て買い取ると言うのならば、それと同じくらい重要な予言をこの見通す悪魔こと我輩バニルが教えてしんぜよう！」

ぐつ、コイツ、毎度の事ながらふんだくる気満々だなおい。

だけど俺だつて無駄に商人まがいの事はやってないぜ（キリッ）

「……半分だ！」

「は？ 何を言っておるのだ？」

「だからそいつらの半分でその予言を買ってやるって言ってるんだよ！」

ステツプワン、絶対無理な要求をする。

「馬鹿者！ この額で我輩の予言が買えるならば安いものであろう！」

「じゃあいらん！ 必要な物だけ買う！」

ステツプツー、強気に断る。

「むっ！ いつになく冷静ではないか。分かった、では三分の二でどうだ？ 我輩と

しては全て処分したかったのだが仕方がなからう」

……かかったな。

「……（ニヤリ）。じゃあ全部買ってやるよ！」

「おお！……ん？ どうしたのだ急に？」

「その代わり、本来目的だった買物物はタダにするという条件でな！」  
ステツプスリー、要求を下げて通し安くする。

この策略はどのジャンルでも使えるからな。特にアクアに……

「ぬう!? 小僧め、人の……いや、悪魔の足元を見おつてからに……」

「おっ! 良い悪感情が大変美味なり、美味なり!」

ステツプフォー、美味なり、美味なり!

「おい! それは我輩のセリフだ! くっ! 貴様もようやく商人らしくなってきたではないか」

「おかげ様でな、これでもうお前に言いくるめられることもなくなるな!」

「ほう、面白いことを言うではないか。では、最近毎晩誰かが添い寝をしに夜這いをしてきた結果、一人では落ち着いて寝れなくなった男よ」

「ぶっ! なっ、なんでその事をお前が知ってんだよ!」

「フハハハハハハハハハ! 我は見通す悪魔! この程度造作もない、その最近外泊が減つたのは……」

「ちよちよちよつとまで! わかった! 俺が全面的に悪かったですバニル様!」

「ならばそこにガラク……売れ残った商品があるのでどうだ?」

「全部買い取らせていただきます……」

人の弱みを見つけ放題とかチートだろ！

この日を境にもうコイツに逆らう意識はなくなつた。というより逆らえない。

「うむ、良い心がけだ。しからは、この見通す悪魔が予言する。汝、今回の旅にてまたもや親しい者の運命……いや、人生を左右する決断を迫られるであろう。ゆめゆめ後悔しないよう気を付けるのだな」

「また今回もずいぶん重い。……まあ、分かつた。料金はこれでいいか？」三億エリス  
「それで十分だ、それはそうと貴様、今回は我輩の仮面を持つていけないのか？」

「いや、どう考えても必要ないだろ」

今回は神器集めもしないしな。

なにより、怪しすぎるだろ！ ……あれ。

「そうか、ではサービスとしてこの新シリーズのバニル仮面をやろう。もしかしたら必要になるかもしれないぞ？」

ただ白と黒の位置が逆になつただけなんだが……。

「そうか？ でもなんか怪しそうな気が……」

「……………」

なんか無言で笑つてるんだが……

「いや！ なんか言えよ！ というか勝手に入れるな！」

「我輩にできるのはここまでだ」

「意味がわかんねえよ。 はあ、もうどうでもよくなったからいいわ」

「まいどあり！ 今後ともバニル商店をよろしく頼むぞ！」

「ここウイズの店だろ！ そう言えば、ウイズはどうしたんだ？」

「あのポンコツ店主ならば奥で焦げておる」

「大体聞かなくてもさっっしてしまおう……」

「また金庫の金で仕入れをしたのか……」

「うむ、いったい何なのだあの才能は？」

「さあな、じゃあもういくな。ダクネスたちを待たせてるんだった」

「でわな」

そう挨拶を交わしてから、ドアを開けようとすると……。

「只今帰りました！ あら、カズマさん来てくださってたんですね。 お久しぶりです」

「おうウイズ、久しぶり。 ……ん？ ウイズ？」

「はい？ どうかしましたか？」

「おい、ポンコツ店主！ 貴様は奥にいたのではなかったのか？」

「はい、だから窓から外に出ましたけど……あつ！ そう言えばバニルさん、私今度こ

そやりました！ 市場で最高の武具になるというバルデイウム鉱石が魔王討伐前の半



分以下に下がっていたので買えるだけ買ってきました」

「そりゃ魔王が消えればそんなに高性能な装備もお役御免だしな。」

「貴様、その金はいったいどこから？ はっ！ さつきまであった小僧の金が消えて  
いる……だど!？」

「どうですかー？ バニルさん？（ニマニマ）」

「……………ば」

あ、早く離れよう。

「ば？ なんですか？」

「バニル式殺人光線——————」

「きゃあああああああああああああああああ」

「……………またな」

思ったより長居したせいで時間が経ちましたな。

めぐみんやアクアも待つてるだろうし急ぐか……。

「遅いですよカズマ！」

「いったいどこで油売ってたの？ もう三十分も待ってたんだけど……」

「そうだぞカズマ、そういう時は連絡してくれ。ま、まあ、これも焦らしプレイの一環だと思えばいつ、私はいくらでも」

「これ以上公道で恥をさらすなエムネス」

「なっ、なんだその新しい呼び方は？ やめてくれ、はっ、恥ずかしい／＼／＼」

「相変わらず痴女ネスの羞恥心はどこにあるのでしょうか？」

「めぐみんまで……グスッ」

「それはそうと、アクア！」

「なにカズマさん？」

「無視なのか？ だが、これはこれで放置ブレ」

「〔スリープ〕!!」ガクッ

「やっど静かになっただな」

「そうですね、ナイスですカズマ」

「それで？ 何なの？」

「ゼル帝はどうしたんだ？」

「今回はギルドに預けてきたわよ」

「そうか……フライドチキンにされてなきやいいな」

「ちよつとそれどういふことよ！」

「さっさと行くぞー。アクア！ あと、ダクネス持ってきてくれ」

「あつ、ちよつと置いてかないでー」

「それじゃあ、お願いします」

「分かりました、では行きますよー……………【テレポート】」

# 王女はおてんば

王城

「アイリス様、お食事の準備が整いましたのでお呼びにまいりました。」

「……………」

「…………？ アイリス様？ 失礼します…………!! バカなつ、いないだど!？」

城下町

「はあ…………」

…………私は何をしているのでしょうか？

もしかしたら、お兄様が来ていらっしやるかも、なんて思っただけで城を抜け出して、こんなところまでできてしまうなんて。

「そんな都合のいいことなんてあるわけじゃないですよね……」

……帰りましょうか、きつとクレアが怒っているでしょうし。

……俺は今、王都内に突然出没した初心者殺しを追っている。

原因はもちろん、あの駄女神だ。

性懲りもなくまた街中で宴会芸をし始めたと思っていたらこのざまである。

やっぱりアイツはここに捨てていこう。

「……つたく、おいアクア！ あいつは今どこら辺にいるんだ？」

「待ってよ！ 今探してるの！……あ！ いたわ！ 向かいの通りよ、女の子に襲い

掛かろうとしてるわ!」

「ふっぎけんなよ! クソツ! 間に合ってくれ!」

このままじゃアイリスの護衛どころか、今日の宿は牢屋になりかねないぞ!

普通に追っていたら追いつかない。

そこで俺はなるべく高いところに登り、そこから……

「【ソオゲキイ】」

矢は狙い通り、敵の眉間に命中した。

「よし、おーい! 大丈夫か?」

よく見れば、まだ子供じゃないか。

フードを被っているから顔は……よく見えないな。

「は、はい。 大丈夫です、助けて頂いてありがとうございます……えっ?」

「いいよ別に。 それに、元はと言えば俺たちがげん……い……ん。 ってアイリス

!?

そのとき、二人の時間が一瞬止まったように感じた。

「おっ、お兄様!? どうして王都にいらっしやるのですか?」

「それはこつちのセリフだ。 どうしてこんなところにいるんだ? 王城にいるのか

と思っただぞ」

「そつ、それはですね……………（シユン）」  
なるほど、こつそり抜け出してきたのか。 だったら…………。

「…………アイリス」

「はい？ 何でしょうかお兄様」

「俺と一緒に散歩でもしないか？」

おてんばな妹に気を使ってやるのも兄の務めだ。

「良いんですか？ ぜひ！ ぜひご一緒にさせてください（パアツ）」

まったく、本当にうれしそうだな。

「よし！ じゃあ、さっそく行くか」

「はい……………しかしお兄様。 他の皆さんのことはよろしいのですか？」

「そういえば……………まあ、別にいいだろ」

もともと王都に着いたらバラバラに行動する予定だったしな。

「……………そうですか、では行きましょうか」

アイリスは後で王城に送ればいいか。

あの白スーツが激怒している姿が目には浮かぶが…………

そして俺たちは王城を観光していった。

「そういえば、アイリスはなんで王城を抜け出してきたんだ？」

「この国にいるのは今日が最後ですから……その、もしかしたらお兄様に……お会いできたかな……と思いますよ」

なっ、なんだこの可愛い生き物は？

思わず胸キュンしたぞ！

はっ！ 落ち着けオレッツ！ 落ち着くんだ。

「そ、そうか。アイリスはお兄ちゃん思いで俺はうれしいぞ」

「はい、私はお兄様の……妹ですから当然です（シユン）」

なんか、すごくアイリスが落ち着いてるんですけど。

あり得ないが、もしかして……。

「あのさ、アイリス！」

「何でしょうかお兄様？」

「もしかしてお「見つけたぞカズマ！ 一体どこをほつつき歩いてたんだ！」

「ダッ、ダクネス？ どうしたんだよ！」



「どうしたじやないだろう！ 初心者殺しを追いかけていったと思つたら、そのまま帰つてこないから心配していたんだぞ！」

「やめなさいララティーナ！」

「アツ、アツアイリス様あ!!?!? なぜこのようなところに!!? おいカズマ！ 一体どういうことだ？ まさか、お前また何かを……」

「何もしてねえよ！ 今回は全面的に無罪だよ！」

「むっ、それは悪かつたな。 それではアイリス様、今日はどのようなご用事で護衛も連れずにいらしたのですか？」

やけに護衛の部分強く言つたな。

でもアイリスもお忍びで来たなんて言えばさすがのダクネスも怒るだろう。

アイリスもすぐく困つたような顔をしてるし……。

「ダクネス、実はさつき王城に一足先に行つたらアイリスが一緒に外に出たいつて言いだしてな、俺が護衛として白ス……クレアに頼まれたんだよ」

「……お兄様（パアツ）」

「クレア殿がお前にアイリス様を任せるとは到底思えんのだが……」

確かに……アイツのことだからアイリスを俺に任せるところか、なるべく遠ざけそう  
だ。

「わ、私からお願ひしたんです。お兄様はあの魔王を討ったお方なのでですからお兄様以上の人などいないはずですよ！」

ナイスアシストだアイリス！

「そ、そうですね。疑ってしまい、申し訳ありませんでした。ですが、今日はもう遅いので王城に帰りましょう」

「もうそんな時間なのか、じゃあ城に帰るかアイリス」

「えっ、えっと……はい」

「……………カズマ、お前一人でアイリス様をお送りしてくれないか」

「ララティーナ……」

「別にいいけど、なんでだ？」

「ほっ、ほらっ、王都に着いたばかりでまだ荷物の整理ができていないのでな。私はア  
クアとめぐみんを連れて先に宿に帰っているぞ」

「なんか、やけに態度が白々しいんだが……」

「おっ、おう。じゃあ行くかアイリス」

「まあ、いいか。」

「はい！ お兄様！」

「しかし、お兄様はなぜ、王都にまでお越しくださったのですか？」

さつきダクネスに今回の依頼の事は明日まで秘密にしておくように言われたしな。

「今回はただの観光にな、ここ最近は忙しかったから」

「まあ、流石はお兄様です。魔王討伐後もだらけることなく日々、研鑽を欠かさないなんて……ステキです／＼」

普段からニート生活送ってたんだが……。

素直すぎる妹からの羨望のまなざしが痛い……。

それにしても今日は、やけに積極的な言葉に聞こえるぞ。

「アイリスも将来はべっぴんさんになると思うぞ。すでに美人だけだな」

「もう、お兄様だったら、あまりからかわないでください／＼」

と言いつつアイリスは、俺の腕に抱き着いてきた。

「しかしどうしたんだ？ 今日はいっぴくに甘えん坊だな」

そういうと、アイリスはまた哀しそうな表情になった。

「お兄様……実はお話したいことがあります」

そして今度は真面目な顔になって。

「ん？ どうしたんだ？」

「私がお兄様とお会いできるのは今夜が……最後なんです」

いやでも、明日護衛に行くんですけど……

「今日は本当にありがとうございます。私の我儘をかなえてくださって」

「いいんだよ、それに、俺も何気に王都の観光をしたことがなかったから楽しかったしな」

明日の事は言わなくていいのか？

なんか完全にお別れを言ってきてるんだが……。

「ですの、そのお礼に……」

(ちゅっ)

そうアイリスがいった瞬間、何かほおに温かい感触が……。

「アツ、アイリス!？」

「ふふっ、これは私の事を忘れないようにする……おまじないです」

そう言つて、小悪魔のような表情をするアイリスに俺はすっかり目を奪われていた。

「では、さようならです。お元気で……お兄様……」

そうして、アイリスは顔を真っ赤にして城の中に走って帰っていった。

「……妹ルートでトゥルーエンドもあり……か」

じゃねえだろおおおおおおおおお!!

どうすんのこれ!?

アイリスは知らなかったっぽいけど明日会いますよ俺たち!

絶対お互いに顔合わせられないだろ。

……しかし、まだめぐみんとダクネスですら踏み込んでない一線を軽々しく超えてきたよ。

これがシチュエーションの力なのか?

あのおとなしいアイリスがあんなに大胆に……。

とりあえず、今日は宿に帰って寝るか。

偉大な先人がこんなことを言っていた。

「明日の事は、明日になって考えよう」と。

「私ったらお兄様になんてことを……」

しかもあんなに、だっ、大胆に……。

恥ずかしすぎて頭から湯気がでそうです。

……でも、これでもう悔いはないです。

だってもう二度と会えないと思っていたお兄様にまた会うことが出来ましたし……  
お別れも言えました。

きつとエリス様に毎日お祈りしたのが届いたんですね。

そつ、それに、これでめぐみんさんやララティーナに大きくリードしたはずです。

しばらくはお兄様の中での一番は私なんです。

……最後までいいですよ。

「もう会えないんですね……」

言葉では言い表せないような喪失感を感じた。

「もう……二度と……(ぼろぼろ)」

「ひぐっ……うっ……っ(ぼろぼろぼろぼろ)」

その日の夜は、静かな寝室で細かな泣き声が一晩中続いた。

翌日

「アイリス様、ご出立の準備が整いましたのでお呼びに参りました」

「分かりました。あの、昨日はごめんなさいクレア」

「本当に心配しました。ですので次からは必ず護衛を連れてください」

「昨日は最高の護衛がついていましたけどね（クスツ）」

「はあ、では本日から祝儀までの間、アイリス様の専属護衛を務めるものを呼んでまいります」

……後悔は昨日の涙と一緒に流しました。

これ以上みっともない姿は見せられません。

これくらい耐えて見せます。

だって王族は強いんですから。

それにしても、なんだか前回のエルロードへの遠征を思い出しますね。

あの時はお兄様達と一緒に楽しかったですね。

「おーい、アイリス！」



そう、このようにお兄様が私の事を呼んでいて……………。

「えっ？ おっ、おにい……………様？」

「えっと……………昨日ぶり……………」

「……………」

エリス様……………こんなのひどすぎます……………。

## 出発と休息

……どうしよう。

あれからアイリスが身動き一つしていない……。

顔を真っ赤にしてうつむいたままだ。

こういうときってなんて声をかけてやればいいんだ？

経験の少ない俺では正解なんて出せるはずがないだろう。

「……なあ、めぐみん……」

「なんですかカズマ？」

「最後のお別れだと思つて告白して去つて行つた後に、実は勘違いでお別れではありませんでしたって状況の時。お前なら相手になんて言つてほしい？」

「なんですかいきなり。しかもやけに具体的な質問ですね。何かあつたんですか？」

さすがに設定を細かくしすぎたか？

「何にもねえよ。お前だつて乙女の端くれならこういうのも考えたことがあるだろ」

「今、さらつとひどいことを言いましたね。私だつて純粋な乙女ですよ。……それで、そんなときにどうしてほしいかってことですか？」

「そうだよ」

「そうですね。私だつたら……」「なんだ、勘違いだったのか……よかつた。君の爆裂魔法がもう見られないなんて耐えられないからね。さあ、今すぐ今日の爆裂魔法を放ちに行こう」……と言つてもらえたら幸せですね」

「……却下」

うん、やつぱりコイツはただの爆裂娘でそれ以上でもそれ以下でもないな。

「なつ、何がいけなかつたんですか？　こう言われたら十人中、十人全員が堕ちますよ」

お前みたいのがこの世に十人もいたら世界が減ぶわ！

「なるわけねえだろ。それもうお前じゃなくて爆裂魔法と結婚しろよ」

「爆裂魔法は私と同義なんです。だから私は爆裂魔法を愛してくれる人じゃないと愛せません。そういうわけで、カズマは今すぐに爆裂魔法を愛すべきです」

「最初から最後まで何一つ理解できないんだけど……」

人選をミスったか……。

そもそも俺の仲間で適任な奴なんて初めからいないんじゃないか？

「おい、さつきから後ろで何をヒソヒソと話しているんだ」

長話をしていたので、さすがにダクネスが怪しんできた。

「ん、何でもないんだ。ちよつとめぐみんがトイレに行きたいらしくて」

「む、そうなのか。めぐみん、あと少しだから我慢してくれ」

「ちつ、違いますよ。カズマ！ 変な嘘は言わないでください」

「わ、分かったから。服を引っ張るなよ」

「プツ、アハハハハハハハッ！」

突然、アイリスが満面の笑顔で笑い始めた。

「やっぱり、お兄様達はいつも通りですね」

「はあ、アイリス様の仰る通り貴様は相変わらずのようだな。サトウカズマ」

「なんで俺だけなんだよ？ 問題を起こしてるのはこいつらも一緒だろ……」

固まっていた空気が今のでだいぶ和んだみたいだ。

アイリスも俺もすっかり調子を取り戻した。

「ま、そういうわけで今回、姫様の護衛をさせていただきます。冒険者の佐藤和真です。どうぞよろしくおねがいします」

「お兄様、今更白々しいですよ」

「そうだな。でも、アイリスに護衛なんて必要なのかすら疑問なんだけど……」

「もうお兄様ったら、私だって年頃のか弱い女性なのですからもつと気を使つてください」

言うようになったじゃないか。

か弱いと女性を強調していたのは気のせいだろうか。

「はあ、アイリス様がますますあの男に毒されている……」

「……うちのカズマがすまない、クレア殿」

「気に病むことはない、ダステイネス卿。あの男のおかげでアイリス様が明るくなつたのも確かなことだ」

「そうか、そういつてもらえると助かる。それで、今回はどのような編成であちらの国まで移動するんだ？」

「此度も貴殿ら護衛のみでアイリス様を護送してもらいたい」

「なんだと!? 前回とは違い、お忍びではないはずだろう?」

「そうだ。無論、私も含め本隊は別のルートからあちらに先に到着している。だからこれは、私のおせっかいのようなものだ」

「……………そうか! だから今回はアイリス様のご指名ではなく国の勅命だったのか。つまりあの手紙を指示したのはあなたか!」

「……………そうだ」

「……………どうやら、私たち二人はともに苦労人らしい……………」

「……………ふつ、そうかもしれないな」

「しかし、なぜお兄様は昨日私に嘘をついたのですか?」

「うそ?」

「王都には観光に来ていたとおっしゃっていたではないですか」

「……………ああ、あれか。実はダクネスに口止めをされてたんだよ」

「もう……あの嘘さえなければ……あんなことは……／＼／＼／」

「昨日の事は……まあ、アイリスも意外と大胆だなあ……と思ったぞ」  
思い返すとなんだか急にアイリスの顔を直視できなくなった。

「もっ、もうお止めになつてください！ 恥ずかしいです／＼／」

そんな感じで俺たちが青春の甘酸っぱい一ページのようなやり取りをしていると……。

「……なんですか？ 屋敷ではダクネスとイチヤイチャして、今度は私の左腕にまで手を出そうとしてるんですか？」

「イチヤイチャなんかしてません（ねえよ）！！」

「そろそろいい加減にしてくださいよカズマ。あなたにはここに正統派ヒロインの私がいるんですよ」

なに勝手にメインヒロイン確定してんだよ。

「正統派ヒロインは清楚って相場が決まつてんだ。お前はおとなしくロリ粹に収まつけ」

「お兄様！ 私はろりわく？……というものではないですよね？」

「安心しろ。アイリスは正統派だから」

俺の中での正統派はアイリスとエリス様だけだ。

「なっ、なんで私と左腕の杵が違うのですか？ 年はたいして変わらないじゃないですか」

「めぐみん……杵は性格と………外見で決まるものなんだよ」

同じ年のゆんゆんはああなの……。

「おい、私の体を……特に胸を残念そうな目で見たことについて説明してもらおうじゃないか」

「カズマとめぐみん、お前たちはいい加減におとなしくしている!!!」

「失礼しました、アイリス様」

「いいんですよララティーナ。……それと、昨日気を使ってくれたことには一応……感謝します」

「礼には及びません。それよりも、出立のお時間が迫っておりますのでお急ぎください」



「分かりました。お兄様、もうすぐ出発のようですよ」

「わかった、今行く」

「おい、サトウカズマ少しこっちに来い！」

「なんだ白スーツ」

今度は一体何を企んでるのやら。

前回は危うく暗殺者に仕立て上げられそうだったからな。

「白スーツいうな。それでだな、今回はこのペンダントをお前にやる。大事に持っておけ」

これは……たしかコイツの家の力をかなり使える奴だったか？

「どういう風の吹き回しだ？ 貸すんじゃないか？」

「万が一があるかもしれないしな。護身用だと思っておけ。貴様の事は気に食わんが……アイリス様を……護ってくれ」

まるで遺言のように重く、そして想いが詰まっているように聞こえた……。

「……よくわからないけど、アイリスは守るよ。それが依頼だしな」

「……頼む」

「ではアイリス様、しばしの別れですがどうかお気をつけて」

「ありがとうクレア、あなたは先に行っているんですね？」

「はい、お待ちしております」

「……あなたの気遣い……感謝します。流石、私の一番の忠臣ですね」

「ありがたきお言葉。……どうぞお楽しみください」

「はい……行つてきます」

「よし、準備はできたか？」

「そういえば、アクアはどこに行つたんだ？」

「アクアなら前回の竜車のトラウマのせいでもここに来た時からいち早く後部座席に座っていましたよ」

「……御者台での恐怖はあいつの心に深い傷跡を残したようだ。」

「今回こそお兄様は私と御者台の後ろに座りましょう」

「もちろん構わないぞ。むしろお兄ちゃんとしては大歓迎だ」

「ここまでは前回とほぼ同じ流れ、ということはこの次はめぐみんが……」

「……まあ、今回は特別に許しましょう」

「意外だな………てつきりまた争うと思つてたんだが……」

「下っ端に懐の深さを見せるのもリーダーの役目です」

「ありがとうございます」

「………いつはこいつなりに素直じゃないが気を利かせてるのかもな。」

「出発するぞ！」

今回もリザードランナーの手綱を握るのはダクネスになった。

ちなみに竜車の外装や中の構造は前のよりも豪勢で立派なものになっていた。

前部と後部で仕切りがあり丁度個室が二つ付いているようなものだ。

よつて今、俺とアイリスは二人つきりということになる。

「それではお兄様、ゲームをしましょう」

「おっ！ いいぞ、ここ最近アイリスに会つてなかったからお前は久々かもしれな

いが、俺はこの日のためだけに日々トレーニングをしていたんだ。簡単には勝てると思うなよ」

「望むところです。よろしくお願いします」

それから、夜の野営地に着くまで俺とアイリスの壮絶な戦いは続いた。

「よし、皆、予定していた野営地に着いたぞ」

「待て！あと一戦でケリがつくんぞ！」

「お兄様、今の時点で私のほうが一勝多く勝っているので今回は私の勝ちです」

「だー、ちくしょー。全然衰えてないな。それどころか前よりも強くなってないか？」

「私だって日夜腕を磨いてきたんですよ。お兄様との再戦のために」

「まいった。アイリスは可愛い妹でありながらよきライバルだな」

「はい。お兄様とはらいばるです」

「あの……いい雰囲気のところ悪いのだが夕食の準備をしてくれカズマ」

「わかった。すぐに準備するよ……手伝ってくれるかアイリス？」

そっとうとアイリスはキラキラした目で……。

「は、はい！もちろんです！」

「お兄様、実はお願いがあるのですが……」

「ん、なにかやりたいのか？」

「はい……その……今回は私がお料理をしてもよろしいでしょうか？」

「アイリスが調理をするのか？」

「やりたいです！ 皆には内緒でコツソリ練習しましたから。他にも掃除や洗濯もたくさん練習したんですよ」

「うん、いい心がけだ。すごいじゃないか。アイリスはきつといいお嫁さんになるよ」

「お、お嫁さんだなんて／＼／＼」

「それで、何を作るんだ？」

「お兄様が前に教えてくださったちゃーはんを私なりに改良したもの作ろうと思います」

「まだあの時の事を覚えててくれたのか。」

「わかった。じゃあ、俺は野菜を切るのを手伝うよ」

「お兄様は私の隣で見守っててください。疲れた夫に料理を作ってあげるのもお嫁さんの仕事ですから……なんて／＼／＼」

……たまに本気でドキツとすることを言うんだよな。

「あー、その、なんだ。俺もアイリスみたいな奥さんがほしいな……なんて言ってみたりして……」

「……………／＼／＼」

「やばっ、アイリス、焦げ始めてるぞ！」

「きやあつ！ 何とかしないと」

「とりあえずこれを入れれば焦げは防げるぞ！」

「ありがとうございますお兄様」

チャーハンのせいでうやむやになってしまったがここ最近で一気にアイリスとの雰囲気は甘くなっている気がするんだよなあ。

「はい、アイリス特製、王族チャーハンです。どうぞ」

「こ、これをすべてアイリス様が!? ララティーナは感激です。こんなに立派にな

られて……」

ダクネスは泣いていて食べるどころではなさそうだ。

「隠し味はこのロブスターの殻を粉末状にして加えてるんです  
いや、ザリガニなんだけどね。」

「さすが私の左腕です。この私の技術まで応用するとは……」

「味に変化をつけたいときはこの特製ふりかけを使ってください」

「私の調理法まで盗むなんて……すごいわアイリス」

そもそも調理法ですらないだろ。

「それじゃあ、いただきまーす。あむっ……ん！……うまつ！……なにこれ超うまい  
！」

「喜んで頂けて良かったです。お代わりもありますからね」

「「お代わり!!」「」」

そんなわけでアイリスの料理は大絶賛だった。

夕食が終わってからほどなくして……

「お兄様……」

「どうかしのかアイリス……」

「あつ、あの、皆さんが寝静まったら、あの湖のほとりに来てくさいませんか？」



## 番外編 甘いチョコは夢の味

まだ魔王が倒される前のある日の早朝……

「……そろそろ起きないと……」

季節は寒い冬。

人は布団の魔力と毎日奮闘する厳しい季節。

まだ城番以外誰も起きていない時間に一人目を覚ました少女がいた……。

「まだ眠たいですけど……頑張ります！」

そう言って、ひっそりとした厨房に少女は向かって行った……。

???

「まずは……材料の準備ですね」

昨日、コック長から大体の場所は聞いておきましたから問題ありませんね。

……でも、私が聞いているときに不敵な笑みを浮かべていたのはなぜでしょう……。

「ええと……ジャムとバター……砂糖にアーモンド……それと卵ですね」

あと、クッキー生地はバターと砂糖と……小麦粉だったはずですよ。

「さて、クレアに見つかってしまうと怒られてしまうので手早く終わらせましょう」

最初にバターを溶かして砂糖と混ぜます。

そして、そこに小麦粉を振るいながら落としてまた混ぜます。

「これで生地は完成ですね。あとは窯で焼いて一時間半くらいかしら……」

次に、またバターと砂糖を混ぜます。

「この後に今度はアーモンドを入れて上の生地も完成ですね」

あつ、クッキー生地がそろそろ焼けたみたいです。

「少し冷ましてからジャムを塗って……その上にさつき作った生地を乗せるんですよ」

ね」

そしてそれをさらに一時間半ほど焼きます。

でも、いざ自分で作ってみるとお菓子というのはとても時間がかかるものなんですネ……。

今度コツクの皆さんにお礼を言いに行きましようか……。

……それにしても……。

「ううっ、窯の火はとても熱いです……でも……焦がさないようにしないと……」  
……そこから、燃え盛る窯の中を少女は見守り続けた……。

「ふう……出来ました！ 私だつてやればできるんです！」  
あとはきれいに包んで……と、完成です！

気が付くと、もう太陽が地平線の向こうから顔を出していた。

「あつ、あら、もうこんな時間?！」

そろそろ皆さんが起きてくる時間ですね……。

早く部屋に戻らないと……。

……そして、厨房はまた静寂に包まれた……。

甘い香りをほんのりと残して……。

???

「おはようございますアイリス様。朝食の用意が出来ましたのでお呼びに参りました」

「分かりました。すぐに行きますね。それとクレア……」

「何ででしょうか、アイリス様」

「食後にレインを私の部屋に呼んでもらえますか？」

「レインを……ですか？ 分かりました。そう伝えておきます」

「ありがとうございます」

「……私に何か御用でしょうか、アイリス様」

「実は、あなたに……クレアには秘密で手伝ってもらいたいことがあります」

???

先に来た転生者達は今日のイベントを広めてなかったらしい。  
竹とんぼとかの変なものは伝わってるのに……。

「なんで……なんでバレンタインデーはこの世界にないんだよおおおおおおお  
お!!」

「どうしたんですかカズマ。そんなに騒いでみつともないですよ」

「そうだぞカズマ。一体どうしたと言うんだ?」

「どうしたもこうしたもねえよ! バレンタインデーだよ! バレンタインデー!」

「ばれん……たいんでー?……なんですかそれは?」

「俺のいた国にあった風習だよ」

「それはどのようなものなんだ?」

「それは……男女の儀式……みたいなの?」

「だっ、男女の……儀式／／／／」

「おいエロネス。いま変なことを考えたろ」

「考えてない」

「年中発情期のダクネスはほつといて、もつと具体的に教えてください」

「めっ、めぐみん!？」

「……分かったよ。バレンタインデーっていうのは女子が好きな男子にチョコレートをあげるイベントだ」

「ちよこ?……何ですかそれは?」

そう、この世界にはバレンタインデーどころかチョコすらないのだ。

「私も聞いたことがないな。だが要は好きな人に物を渡せばよいのだろうか?」

「まあ、そうだな。……何かくれるのか?」

「私を侮辱するような奴にやるものなんて無い!」

「なんでさ……事実を言ってるだけだろ。……め、めぐみんは何かくれるよな? 最

近それっぽいアピールしてただろ」

「めぐみんは大人っぽくてナイスバディだな」って言ってくれたら考えてあげてもいいですよ」

「黙れロリ粹……」

「……アルカンレティアへ心の湯治にダクネスと行ってきます。一か月は戻りません

ので……」

「私の心もひどく傷ついた。そういうことだカズマ」

「いや、お前はめぐみんにも言われてただろ。つて、待てよ！……本当に行っちゃまった……」

確かに少し大人気なかったにしてもやけにスムーズだったな。

本当はただ温泉に行きたかっただけなんじゃないか？

???

いろいろ考えているとアクアが外から帰ってきて……。

「カズマ、カズマ！ 今日バレンタインデーでしょ？」



……コイツ今なんて言った？

「お前どうしたんだ？ 確かにお前はバレンタインデーを知ってるんだろうけど……」

「何を言ってるの？ 好きな人にチョコをあげるのがバレンタインデーでしょ？」

……なん……だと!?

……あのアクアがまさかこんなストレートなことを言ってくるなんて……。  
……なんだこの感情は？

今までただの駄女神でしかなかったコイツが急にかわいく見えてきた。  
本当に黙っていれば女神だからなあ。

「そ、そうか。まあなんだ、俺もお前の事は意外と「それでチョコは？」」

「……………は？」

「だから、私にくれるチョコレートはどこって聞いてるんだけど……」  
「バレンタインデーは女が男にやるもんだろ！」

前言撤回、やっぱりコイツはただの駄目神だ。

「はあ!? 何とぼけたこと言ってるのよ！ 逆でしょ！」  
それはドイツの風習だけだな……。

ついでに言うならバラだけど……。

「……はあ。あの店にでも行くか……」

「ちよつと、聞いてるのカズマさん。なんで無視するの?」

「今日は外泊してくるから。あとめぐみんとダクネスは一か月は帰らないからな」

「それどういふことよ、私聞いてないいいんですけど! じゃあ今日は私一人つてこ  
とじゃない!」

「じゃあな……」

「待つてよカズマさん。行かないでー。私を一人にしないでよー!」

そんな喚く女神を聞いて、俺はあの店に向かった。

???

「よし、この宿に来るのも久しぶりだな」

お姉さんたちに注文を済ませて、早々と準備に取り掛かる。

準備って言っても体をきれいにして寝るだけだが……。

「めぐみんもダクネスももう知らん。アイツに至っては論外だ。……早く寝るか」  
そして早々に俺は深い眠りに落ちた。

???

「……さま。お……さま」

混濁した意識の中で誰かに呼ばれる声があった。

「起きてください、お兄様。……せつかくここまで来たのに……」

目の前にアイリスがいた……。

「アイリス……なのか？」

「あつ、お目覚めになりましたかお兄様？」

「たつた今が覚めたぞ」

……ちよつと待て。

アイリスがこんな遅い時間に、しかもこんなところにいるわけがない。

……つまり、これは夢なのか？

でも希望にはアイリスじゃなくて「俺を癒してくれる女性」って書いたんだけどな

……。

いや、でもアイリスは俺を癒してくれる大切な妹だから一応該当するのかな。

そうと分かれば、少しくらい妹ルートを堪能しても……いいですね。

だってこれは夢なんだから……。

勿論健全な範囲でな。

「……どうしたんですかお兄様。ぼうつとして。もしかしてお体の調子が悪いのですか？」

「いいや、そんな事はないよ。つい俺を起こしに来てくれた可愛い妹に目を奪われて

しまつてね」

「ふえっ!? か、可愛いだなんて……もう、ご冗談はやめてください／＼／＼」

「冗談なわけではないじゃないか。アイリスは間違ひなく可愛いよ。」

「……………あ、ありがとう……………ごぎいます／＼／＼」

性格は本人のままみたいだな。

「それで、お兄様……………今日は何の日か覚えてますか？」

「ん、何か特別なことなんてあつたか？」

昼間の影響で嫌な記憶ごと何の日かなんて忘れてしまつた。

「そ、そうですか……………」

アイリスはそう言つて手に持つていたもの隠した。

「アイリス、今何を隠したんだ？」

「何も隠してません！ 見間違ひなのでは？」

そこには綺麗にラッピングされた何かがチラツと見えた。

そこで俺はようやく気付いた。

「アイリス……………ごめんな、忘れていたわけじゃないんだよ。少しショックで飛んでただけなんだ」

「……………今回だけですよ。特別に許してあげます……………」

エリス様の時のようなギャップ小悪魔に思わずドキツとしてしまう。

「お兄様の仰っていた「ちよこれー」というものはよくわかりませんでした、私なりに考えてタルトを作ってみました。……うけとって……くれますか？」

上目遣いでそんなことを言われたら……。

「アイリス……結婚しよう」

「ええっ!? け、けけ、結婚だなんて……////。……で、でも、お兄様が望まれるのであれば……////」

夢だと分かっていたら思い切ったとも言えてしまうものだ。

アイリスもなかなか乗り気だな……。

「せっかくアイリスが作ってきてくれたんだ。食べてもいいか？」

「ど、どうぞ。美味しくできたか不安ですけど……頑張りました!」

「それじゃあ、いただきまーす。……」

「あ、あの……もしかして、おいしくない……ですか？」

「……ウマーーーーーい!!!!」

「ひやつ、び、びつくりしました」

「ごめんごめん。でもこれすごくうまい！　うまく言葉が言えないけど超うまい！」

「そ、そうですか？……よかったあ」

「でもアイリスってこんな料理がうまかったんだな」

「た、たまたまですよ。お兄様にはまだまだ遠く及びません」

「そんなことないぞ。これは俺が食べてきた中で一番だよ」

「あつ、ありがとうござい……ます……／＼／＼／＼」

「うまいうまい……」

「もうお兄様ったら。そんなに一気に食べてはのどに詰まらせますよ」

「大丈夫だって……うっ……ごほっ……ごほっ……み、水を……」

「だから言ったじゃないですか！　は、はやくお水を……」

間一髪のところアイリスのくれた水によって一命はとりとめた。

こんなんで死んだら、フグにあたって死にそうになったあの時よりもダサいだろう。

???

「……それにしても、よくバレンタインデーなんて知っていたな」

「お兄様が前に教えてくれたではありませんか」

「ずつと前に言ったことをまだ覚えてるなんて……本当に自慢の妹だ。」

「ありがとうな。本当に嬉しいぞ。何かお返しがしたいんだけど……」

「……お返しなんていいんですよ。それにお兄様の話では「ほわいとでー」というのは  
一か月後なのでしょう？」

「王城には簡単に入れないからな。今すぐお返しをしたいんだよ」

「そう言うと、アイリスは少し考えてから……」

「……それでは、一つだけよろしいですか？」

「おう、何でもいいぞ。お兄ちゃんがなんでも叶えてやる」

「……………です」

「なんて言っただんだ？」

「お兄ちゃん……一緒に寝たいな……だめ……ですか？」

「これはアカン。」

「理性が一瞬飛びそうになるが何とか踏みとどまる。」



「いいぞ、こつちにおいで」

「お、おじゃまします」

絵面では危ないが……。

俺はいたって紳士だ。

それは夢でも変わらない……はずだ。

「こんなことならいつでも構わないぞ」

「ほっ、本当ですか!？」

そんなことだけで満面の笑みを浮かべる妹に心が浄化される。

「本当だよ……ん、眠いのか？」

「は、はい。朝が少し早かったもので……」

なんか随分と細かく設定されてるな。

「俺がついてるからゆつくり寝ていいぞ」

「ありがとうお兄ちゃん………すう」

あつという間にアイリスは寝てしまった。

「夢とはいえ、嬉しかったぞアイリス。俺はそんなアイリスが……好きだよ」

どうせ夢なんだから思ったことを言っても……いいよな。

俺がそういうとアイリスが寝息をたてながら顔を真っ赤にして抱き着いてきた。

「……………すう……………すう……………」

……………起きてるんじゃないか？

「アイリス……………もしかして起きてるのか？」

あんなの聞かれてたら夢でも恥ずかしい。

そんなことも知らずにアイリスは俺の胸に顔をうずめてきた。

……………たまにはこんな夢もいいかもな。

なんか夢の中なのにだんだん俺も眠くなってきたな……………。

???

太陽の日差しが窓から入ってきてまぶしい。

「……もう朝か……」

久々にいい夢を見たから気分がとてもいい。

アイリスも安らかな顔で眠っている……。

「……………」

……おかしい。

なんで夢から覚めてもアイリスが消えていないんだ!?

っていうことは昨日のは……まさか夢じゃない!?

「……お兄様、おはようございます」

「なんで、アイリスがこんなところに……」

「……お兄様、昨日の事は一夜の夢ということにしましょう」

「えっ?」

「これでは卑怯ですからね。このことは……内緒……ですよ」

指を口に当てながら片目でウインクしながらそつと呟く。

そんなアイリスからでる魅力にまた絶句してしまう。

「お、おう。その、わかった」

「アイリス様——!」

「この声は……レインか？」

「あつ、カズマ様、おはようございます。そうではなくてアイリス様、今すぐに帰りましょう。早くしないとクレア様に怒られてしまいます！」

「そうですか、ではお兄様また会いに来ますね」

「はは、待ってるよ」

……どうやらこれからは随分妹に主導権を取られてしまいそうだ。

???

「無理を聞いてもらってありがとうございますレイン」

「どうかクレア様にはご内密にしてくださいね」

「分かっています。ではまた後で」

よろこんでくれたかな……お兄ちゃん。

それにあんなことも言ってもらえたし。

「はやく魔王を倒して迎えにきてね、お兄ちゃん……」

## 俺と姫の変化

「……お待ちしておりましたお兄様」

「結構待ったか？」

「いえ、私もさつき来たばかりですから……」

めぐみん達はとつくに寝静まって、もうすぐ真夜中という時間……。

空は雲一つなく、星々が光り輝き、満月が湖の水面に映っている。

「……本当に綺麗だな……」

「えっ!？」

そう言うと、なぜか急にアイリスが顔を赤らめて……。

「どうしたんだ？ こんなにいい景色なのに……」

「えっ？ そつ、そうですよね……。本当にいい景色ですね……」

また驚いたかと思えば、今度は恥ずかしそうにうつむいた。

そして、少し間を開けてから……。

「……あつ、あの……お兄様……そつ、その……」

焦ってるせいか、口ごもって言葉がうまく出せていないみたいだ。

「……落ち着いてからでいいよ……何か大切なこと言おうとしてるのは分かるから」  
それを聞いたアイリスはちよつと安心したようで……。

「……ありがとうございます。それでは少しだけ……」

それからいくらか時間が過ぎた後。

アイリスは何か決心をした表情になり……。

「お兄様……私は……お兄様の事を心からお慕いしております……」

……えっ？

……ま、まさかな。

「まっ、まあ、お兄ちゃんとして好かれてるのは嬉しいぞ」

「兄としてではなく……その……と、殿方として……です」

……一瞬、頭の中が真っ白になった。

俺がシヨックのあまり放心してフリーズしていると。

「ええと……恥ずかしいので何か言っただけ……」

そこでもうやく意識が戻ると。

いやいや、大事なことつてせいぜい「私の付き人として一緒に来てくれませんか?」とかだと思つてただけど……。

……というかアイリスつて俺のこと異性として見てたのか!?

確かに今までそれとなくそれっぽいオーラは出してたけれども。

でもそれは兄弟愛的な感じであつて……そうじゃなかったつてことだよな。

……どうしよう。

めぐみんはいつも半々な感じで言ってくるからうやむやになるし、ダクネスははつきりとは言わないからそれとなく流れるけど……。

……これはどう見ても……告白……だよな。

……ということとは返事を返さないといけない……のか?

でもアイリスは俺の妹だし……本当にそうなのか?

妹として見れているのか?

最近のアイリスの一言一言にドキドキしてしまうのはなんでだ?

妹相手にそんな反応は……ふつうしないな。

つまり……俺もアイリスを……いつ、異性として見てるつてこと……だよな。



「アイリス……おっ、俺は……」

クソツ、なんて言えばいいのか思いつかない。

アイリスを女性として見ていたことは分かった。

だけど今度は好きかどうかでことなんだが……。

自分の中でアイリスの立ち位置が急に変わったせいで……正直……よくわからない

……。

ちなみにいろいろ考えてる間、ずっと俺の心臓は鳴りっぱなしだ。

そんな風に俺が一人で悶々と悩んでいると……。

「私に気を使わなくていいですよ……。お兄様が私の事を妹としか見ていないのは分か  
かってましたから……」

そう言つて空元気な笑顔をしたアイリスは、どこか悲しみを必死に隠そうとしている  
ように見えた。

……違うんだよ。

「……そうでもないぞ」

そんなことをつぶやきながら俺はアイリスを抱きしめた……。

「きやつ……おっ、お兄様!? 一体何を!」

アイリスは突然のことで一瞬驚き、その後はどうすればいいのかわからないというように困った顔を浮かべた。

「今俺が思っていることを全部言うから聞いてくれ」

アイリスはコクツツとうなずく。

悩んでも仕方ない……。

未だに結論なんて出せていない。

……なら、せめて正直に言おう。

「まず一つ目だけど、俺はお前の事を女として見てるみたいだ」

「ええっ!? それは、私は妹としてではなく、一人の女性として……いえ、異性として

見てくださる……ということですか?」

「そうだよ、アイリスは可愛い妹で素敵な女性だ」

「妹で……女性……」

「だけどアイリスが好きなのはわからないんだ」

「わからない……ですか?」

とても不安そうに……というより純粹に不思議そうに聞いてくる。

「ぶっちゃけるとアイリスを異性として見てるってさつき自覚した」

「ず、ずいぶんはつきりと言いますね」

「だからさ、すごく都合のいいことを言うけど……俺の考えがまとまるまで待っててくれないか？」

我ながらなんて最低なことを言ってるんだ。

「……………」

アイリスは押し黙ってしまった。

「……………やっぱりダメだよな。こんな身勝手な「いいですよ」」

「へっ? いい……………のか?」

「お兄様が我儘なのはよく知っていますから。なので……………私も一つ我儘を言ってもいいですか?」

「……………わかった。アイリスの気が済むのならそれでいいぞ」

「それでは……………」

???

……まずい、非常にまずい。

とりあえず聞いてくれ！

俺は今理性との壮絶な戦いをしている。

なぜこうなったかと言うと……。

「……添い寝してください……」

アイリスは振り絞るように願いを言った。

……!!??

いや、確かにいつぞやの一夜の夢ではそんなことをしたこともあったけれども……。

あの時は妹だったけど、異性として見ている今は天と地ほど違うものに思える。

そもそもあの時は夢だと思ってたからあんなに大胆になっただけであって……

っーか夢だとしても何やってんだよ俺……。

「……分かってるのか？ 俺はアイリスを女として見てるんだぞ。男は皆野獣であつ

てだな……」

こういえば少しは怖気づいてくれるといいんだが……。

「……別に……いいんですよ？」

まるで誘ってくるかのよう、アイリスはクスツと笑いながら小悪魔な笑みを浮かべている。

一体どこで覚えてこんなことを覚えてくるんだ？

サキユバスのお姉さん達にレクチャーでもしてもらったんじゃないのか？

「おっ、おれは紳士だからな！」

「ふふっ、わかってますよ」

……というやり取りがあり現在に至る。

前は気づかなかったけどこれはヤバイ。

この距離だと髪の毛からの甘い匂いがダイレクトにくる……。

それに密着してるわけだからその……いろいろと……ね。

さらにはさっきのアイリスの発言も相まって……。

……静まれ俺！

さすがにこれは犯罪だから！

ここで止まらないとR—18まっしぐらだから！

「お兄様、もう少し落ち着いてください」

「いや、なんでお前はこの状況でそんなに落ち着いていられるんだ？」

「ふふっ……私だって……本当は……とても緊張……してるんですよ」

今度は照れながらそんなことを言ってくる。

……ほんと女ってズルいな。

こころろ変わる表情にいちいち翻弄されるこっちの身にもなつてほしい。

「それに……前は何か勘違いされていたようですが、今日は気まぐれ……ではあ

りませんよね？」

「安心してくれ。今は正気だ。ついでに言わせてもらおうと……くつつきすぎじゃない

か？」

「そうですか？ 小さいときにララティーナが添い寝してくれた時には「私の事は抱

き枕と同様に思ってください」と言っていたのですけど……」

ダクネスめ、余計な入れ知恵を……。

「……それに……今夜が真正正銘の最後の夜……ですから  
そうポツンとつぶやくアイリス。」

「……なあ……もしもの話だけど、今回の縁談を断ることとか投げ出すことはできないのか？」

そう言うアイリスは静かに論すよう……。

「それは……無理な話です。この同盟には我が国の存亡がかかっているんですから……」

「……だ、だけど他にも何か手段はなかったのか？」

「様々な手段を模索しましたが、これが最善策だと……。いいんですお兄様、これは私の責務なんですから」

そしてまた、あの哀しそうな笑みを向けてくる。

……今の今まで邪なことを考えていた自分をぶん殴ってやりたい。

「アイリス……」

そして、まるで包み込むようにアイリスを抱きしめる。

「……約束する。告白の返事は必ず返すって……」

「……はい、いつまでも……お待ちしています……」

そうすると急に眠気が襲ってきたのか、アイリスは安心した顔で眠ってしまった。

この小さな体一つに国の存亡がかかっているんだな……。

その重圧は一体どれほどのものなのだろうか。

本当に俺にできることは何もないのか？

俺はどうしようもないことに悩み続け、結局、夜が更けても一睡もすることはなかった。

その後、今回目指す国に到着するまでの間、アイリスは普段通りの振る舞いをしていった。

そして、一行は遂に目的地に到着した。

???



今回アイリスが嫁入りをする国。

国名は「ガルガンダ」。

ベルゼルグに最も多くの精鋭を送り、そして現最強国とうたわれる武闘派。すべての基準が戦闘力であれ魔法であれその力によって評価される。

そんな何よりも力を求めている奴らが代々勇者の遺伝子を取り入れてきたベルゼルグの王族の血を手に入れようとするのは、ある意味至極当然ともいえよう。

実を言うと、ベルゼルグはそんなに弱体化していない。

なぜなら、日本からやってきたチート持ち達は今だにとどまっているからだ。それに王族が一人加わっただけで他の国は瞬殺できるだろう。

だがそれが出来ない国が一つだけあった。

それがこの国である。

ではなぜ？

一つは神器にも匹敵する魔道具を多く所持しているからである。

なぜそんなものを持つているのかという理由は明らかにされていない。

そしてそれらの存在をカズマ達知らないのは、極秘にされているので当然である。

このことは各国のトップ層しか知らない。

だがこれでもまだベルゼルグとは同等レベル。

その二国の勝敗を決定づける要因は、今回のアイリスの結婚相手にしてガルガンダの第一王子。

大英雄と称えられるその男の名は「グレン」。

その一つの体で十を超える魔道具を扱う、人間としてのイレギュラー。

中でも彼を大英雄とまで言わせた魔道具がある。

世界で彼だけが唯一使うことが出来る「神器を無効化する神器」。

彼の前では神器は無効、魔法も物理攻撃もすべて他の魔道具で無効化される。

……「無敵」。

……ちなみに年齢は今年で三十になる。

長くなってしまったがこれが……いや、彼こそベルゼルグがガルガンダに後背を取っている要因そのものである。

よって、唯一敵に回したくない国の機嫌を損なわないために今回この縁談は行われている。

「……というのが今回の縁談の真相だ」  
「いやいや相手が三十って犯罪だろ」

???

このときは誰一人として思いもしなかったであろう。

後に語り継がれるほど大事件が起ころうとしていることに……。

## アイ × ト × コイ

クレアの説明を受けて一悶着したあと……。

「いい加減そろそろ機嫌を直して下さいよ」

「うるさいな、俺は絶対に納得しないからな！」

「なあ、カズマ。お前はさつきから何に怒っているんだ？」

「そんなん当たり前だろ、相手の年齢だよ！」

「……年齢がどうかしたのか？」

「お前らは何も思わないのか？ まだせいぜい中3くらいのアイリスと三十近くのおっさんが結婚するんだぞ！」

そんな俺に全員が不思議そうな顔をして。

「確かに歳の差はありますが貴族などの上流階級では特別珍しいことではありません

」

「めぐみんの言う通りだ。思い出したくないが私もアルダープと結婚させられそうになつたくらいだからな」

「いや、籍は入れたはず」「何か言いたいことがあるのかカズマ?」

「だつてお前はバツネいだだだだだだだ、分かった、分かったから無言でアイアंकローはやめてくれ!」

「まったく、次に口にしたらエリス様の元に送つてやるからな」

「とりあえずダクネスのバツイチの話は置いといて、さつき言つた通り珍しいことではないのです」

「めぐみんっ!?!」

さすが文明が中世レベル、政略結婚に歳は関係ないのか。

「……そう言えばアイリスはどこに行つたんだ?」

「アイリス様ならさつきクレア殿が連れて行つたぞ、これ以上お前から悪影響を受けないようにとのことだ」

白スーツの奴、出発の時のあの言葉はなんだったんだよ。

「目的地にも着きましたし護衛の依頼は終わりと申つてましたよ」

「そうか……じゃあ聞くけど、ここどこ?」

「「さあ?」」

「さあ?……じゃねえだろー! 俺まだアイリスとお別れの挨拶すらしてないんだぞ、これじゃあ、もうあいつらがどこにいるのかわかんねーだろー!」

だって昨日あんなことがあつた手前挨拶もできないってひど過ぎるだろ。

「八つ当たりしないで下さいよ、そもそも護衛の人の話を聞いてから一人ブツブツと何か言いながら周りを見てないカズマのせい置いてかれたんですよ」

「それなら一声かけてくれたって……とりあえず揉めても仕方ないし、追うぞ」

「原因から何から何までカズマの自業自得なんだが……いや、分かった、アイリス様達はこの方向に向かっていたぞ」

「了解、おいアクア、ぼうつとしてないで早く行くぞ」

「わかったわ、じゃあ私はこの国のお酒を飲んでくるわね!」

「了解……つて、どこ行くんだよ……行っちゃまった」

「どうしますか、カズマ?」

「どっちみちあいつがいるとロクなことにならないそうだから後で回収すればいいだろ」

「アクアには悪いですが、確かにそうですね」

「それで、どっちに進めばいいんだっけ?」

「あっちだ」

ダクネスのさした指はさつきとは別の方向をさしていた。

「……………おい」

「……………」

「……………あのさ、これ以上お前に変な属性はいらないからな、方向音痴とか勘弁してくれよ」

「わつ、私だつてわざとやっているわけではないんだ、もしかしたらこつちだったかもと思っただけで……………」

「わかんないなら最初からそう言えよ！」

「これじゃあ本当に迷子なんだが。」

「カズマ様ー、はあ、はあ、探しましたよ」

アイリスのもう一人の教育係であるレインが迎えに来てくれたらしい。

「いやいや、すいませんわざわざ迎えに来てもらつて」

「本当ですよ、どうすれば私たちの進行方向の逆に進めるんですか!？」

「ははっ……………すいません」

チラッと見るとダクネスはピッツと反対側を向いてしまった。

「とにかく見つかつてよかつたです。では、アイリス様が待ちくたびれているので早く来てください。というか最後にカズマ様に挨拶するまで相手の王城には入らないと



まで言っているのです。後生ですから早く！」

そう言っただけでクレアは涙目になりながら訴えかけてきた。

俺も大概だけどアイリスもなかなかワガママになったな。

初めて会った時の無垢で従順なアイリスはどこに言ってしまったのやら。

そんな感慨に浸りながら俺は急かすレインを後ろに、アイリスの元へ向かっていった。

???

「もう、一体どこで遊んでいたんですか」

「ごめんな、アイリスのことを考えてぼうっとしててな」

「むう、なんだか乗せられてる気もしますが私をギユウ〜としてくれたら許してあげます」

「そんなことならお安い御用だ」

「……………です」

「……………何か言ったのかめぐみん？」

「もう我慢の限界です！ ちょっと気を利かせて一日自由にただけでどうしたらここまで二人の距離が近くんですか!?!」

「そうか、いつもこんなもんだろ？」

「そうですねお兄様」

「そう言いながらさらさらっとな俺の腕に自分の腕を絡めてくるアイリス。

「ああー!!」

「なんなんですか、それは私に対する挑戦ですか!?!」

「アイリス様、そ、その、昨日までとカズマへの接し方が違うように感じるのですが……………何かあったのですか？」

「そつ、それは……………お、大人の階段を……………／／／／／」

「……………」

げ、原子爆弾落としやがった。

「ちよーつとまで、アイリスその言い方はマズイ」

「カズマと下つ端が……」

「大人の……階段……」

「お前らもすぐに変なそう……ぞう……ぞう……を……」

突然、背後から放たれた強い殺気に言葉を詰まらせながら振り返ってみると。

「サツ、ササ、サトウカズマ……!!モウ……オマエヲイカシテオクコトハデキナイ。ころす殺すコロスコロスコロスコロス！」

「踏みとどまってくださいクレア様！」

……あ、はい。

目の前には魔王ぼりの迫力と殺意を纏ったクレアが剣を抜いて今にも俺に飛びかかろうとするのを必死にレインが食い止めていた。

……うん、これは死ぬな、確実に殺される。

今のうちにエリス様に話す言い訳でも考えておくか。

俺がもうすでに天に召される覚悟を決めていると。

「落ち着きなさいクレア」

「はい、アイリス様」

……犬か？

「あなたが考えているような事は一切していません。そつ、それはまあ……いつかはそういうことも……」

頼むからこれ以上の爆弾発言はやめてくれ。

「アイリス冷静になつて下さい、それと他の皆様も話を聞いてください。今日の夕方ごろに相手方の王城に入城することになったので、それまでアイリス様はカズマ様一行と僅かではございますが散策などしてはいかががでしょうか」

「行きます！ 良い提案をありがとうございますレイン」

「そんなつ、これ以上この男とアイリス様と一緒にさせたら今度こそ……あ、あの……レイン？ 分かったからそんなに怖い目で見ないでくれ」

「それでは、あとはよろしくお願いしますカズマ様」

「すみません、一つ聞いてもいいですか？」

「はい、何でもでしょうか？」

「予定ではこちらに着き次第王城に入城するはずではありませんでしたか？」

「それが、つい今しがたあちらの方から入城は夕方ごろにしてくれとの連絡が入りまして、理由は伝えられておりません」

「それはまた随分横暴で一方的だな」

「「お前が言うな！」」

「がはっ、つておい、二人そろって殴ることはねえだろ」

「身の程をわきまえない発言は制裁するのが世の常だ」

「アイリス様に手を出したら地獄の悪魔と契約してでもお前を始末するからな」

「後半やつに限ってはもはやただの脅迫だろ」

「何バカやつてるんですか、早く行きますよ」

めぐみんもさっきのやりとりの後でなんだかあたりがきついし。

「大丈夫ですかお兄様、さあ、わたしと、觀光に行きましょう」

「そこ、聞こえてないとも思っているんですか、何が「わたしと……」ですか」

「何も聞こえません、ほらお兄様早く行きますよ」

「うおっと、分かったから引つ張るなって」

はしやぐアイリスに引かれながら俺は城下町に走っていった。

「……それではあとはお任せしますね」

「……うむ、了解した。行くぞめぐみん……めぐみん？」

「……カズマのあんな顔は初めて見ました」

「めぐみん……そうだな、あいつが私たちにあのような顔を向けたことは一度も無かったな」

「本当ですね、あの男ときたら普段は私達がちよつとからかっただけですぐ鼻を伸ばすくせに……」

「……それでも私は誇らしいと思う、カズマもそうだがアイリス様のあるなに幸せそうな顔を見たのも初めてだからな、幼き時からの教育係としてこれ以上の喜びはない……」

「……はは、その言葉も今にも泣きそうな顔で言っていなかったらキマっていましたけどね」

「それほどあいつのことを想い続けていた……ということだろうよ。なんとたって私の初恋だからな……」

「私だつてそうですよ。もう、泣きたかったら泣けばいいのに……ほんと、不器用ですね、ダクネスも……私も」

「……飲むか」

「そうですね、今日ばかりは飲まないとやってられません……」

「……酒は許さないからな」

「……」

「……ダステイネス卿もめぐみん様もあのようになり越えているのですよ。なのでクレア様もそろそろ機嫌を直して……あらつ、さつきまでここにいたのに。……はあ、お二方の代わりにそちらの監視と護衛は頼みましたよ」

???

「何処か行ってみたい場所は何かあるか？」

「そうですね、確かハチベエが初めて訪ねる街では冒険者ギルドに行くと大体のことが分かると言っていました」

「ハチベエ？この世界にそんな変わった名前なのやついるのか？」

「アクセルで暮らしているカツコイイ仮面を着けたお調子者の私のハチベエです」

「……そうか、まあ大体の察しはつくがとりあえずギルドに行ってみるか」

「はい！」

???



「金がない!」

「はい、この国では基本的に通貨として機能している物は何もありません」

「それじゃあ何かを手に入れたい時はどうすればいいんだよ」

「簡単ですよ、闘って勝てばいいんです」

「はい?」

「だから、その所有者と何か勝負をして勝てば目的の物を入手できます」

「そんなん爺さんとかだったらすぐに負けて取られるぞ」

「先ほども言いましたが《勝負》と言ってもい戦闘力に限ったことではありません、時に知力や特殊技能といったいろいろな手段があるので一概には言えません。そもそも全国民に食料の配給がされているので餓死するなんて事はありませんよ」

「それならそこでネロイドが飲みたいってなったらそこのおっちゃんやんと勝負をしないとならないのか?」

「そうなりますね」

そんな俺たちの会話が聞こえたのか、ネロイドのオヤジが話しかけてきた。

「おうその兄ちゃん、うちの最高級ネロイドが飲みたいのかい、なら俺と勝負をしな。お前さんが俺に勝てたら好きだけ飲んでいいぞ」

「ああわかった、ただし……やるのは俺じゃなくてこの子だけだな」

「……………えっ?」

「あのー、そこのお嬢ちゃんがか?」

「そうだ、このみるからにか弱そうで美しい俺の妹が相手になるぜ」

「お兄様、これはその……」

「頼んだぞアイリス」

「は、はい!お兄様のお願いとあらば私はなんでもします」

「よし分かった、じゃあそっちは何を賭けてくれるんだい?」

「賭ける?」

「おいおい、こっちがネロイドをかけてるんだからそっちも相応のものベットしてもらうぜ」

「マジか……じゃあアイリスの肩たたき券でどうだ?」

「がんばります」

「ふざけんな……と言つてやりたいところだが、お嬢ちゃんの可愛さとか弱さに免じて許してやらあ」

「話がわかるなオヤジ、それじゃあ」

「よ、よろしくお願いします」

「特別に両手を使つてもいいぞお嬢ちゃん」

「おっ、酒場のオヤジがいたいけな少女をいじめてるぞ！」

「うるせー、これは対等な勝負だつての」

「勝負は腕相撲で、レディファイツ！」

「えいつ」

その瞬間、アイリスの可愛い声とは裏腹にオヤジが宙を舞いながらリングの机が真つ二つに割れた。

「……マジで？」

「お兄様やりました、褒めてください」

「おっ、おう、よくやったなアイリス」

俺が若干引きながら期待の目で見てくるアイリスの頭を撫でると満足そう抱きついてきた。

「えへへへへへ♪」

……ていうか素手でこんなに強かったらあの時初心者殺しも一人で倒せたんじゃないか、なんて。

あまりの暴力に酒場の連中も全員がきつと引いてるだろうし……。

「「「うおーー!!」」」

……へっ？

「嬢ちゃんすごく強いんだな」

「強いやつは大歓迎よ、困ったことがあれば協力するぜ」

「いててて、少しはこっちの心配もしてくれよ、とまあ、驚いたぜ。勝負には負けたが  
いいもんを見してもらったよ」

さすがは国風が脳筋思考なだけはある。

アイリスはすでに英雄みたいな扱いを受けていた。

……さてよ？

この後も勝負をどんどんアイリスに任せていけばなんでも手に入るんじや。

「アイリス、どんどん他のやつと勝負しに行くぞー」

「はい、お兄様」

よし、まずはこの街で一番の豪邸を……。

……。

背後にさつき感じたものと同じ殺気を感じるんだが……。

「……言い残す事はあるか？」

白スーツの死神が剣構えて立ってた……。

……今度こそ死ぬよねこれ？

## 乱入

.....。

「そろそろ幕切れだな」

お父さん、お母さん、俺は今合法的に死刑にされそうです。

「頑張ってくださいお兄様ー」

???

俺がエリス様のもとに行く覚悟を決めてた時に。

激昂したクレアをなんとかアイリスがなだめてくれたところまではよかった……。

なかなか納得しないクレアを見ていた野次馬が余計なことを吹き込むまではな……。

「その白服の姉ちゃん、そんなにその坊主をとつちめてやりたいんだっただらびつたりの場所があるぜ」

と言われて案内されたのは闘技場だった。

「なあ、俺たちはまだ話をしてないだろ？ どつかの悪魔も言つてたけど話し合おう、人とは会話が成立する生き物だ」

「残念だが私は貴様を人として見てないのでな、話し合いの余地などない」

あかん、もはや話を通じない。

「ア、アイリスはもちろん止めてくれるよな、な？」

「いえ、久々にお兄様の勇姿が見られるのなら、私としてはむしろ歓迎です」

……気持ちは嬉しいんだけどね。

「でもさ、これから王城にも行くわけだしここで目立つのもあれだしさ、いやもちろん俺が本気を出せば白スーツくらい速攻で……」

「……お兄ちゃんのかっこいいところをみてみたいな……だめ？」

……グハアッ！

アイリス、シュンとしながらの上目遣いは反則だろ。

「……まかせとけ、瞬殺してくる」

???

「どうした、随分と余裕そうではないかサトウカズマ」

「おいおい忘れたのか、お前は前に俺と闘ってボロ負けしたことを。今度はこの大衆の面前でスッポンポンになりたいのか、それならとんだ痴女だな？」

「うるさい、過去のことを今更出すな、あと痴女いうな。貴様の小賢しいスタイルへの対策は十分している、変な期待はしても無駄だ」

「そう言っつて瞬殺されたどっかのスカしたイケメンみたいにならないといいな」

「……? 何を言っつているのかは知らんが余計な小細工をする前に仕留めればいいだけだ」

仕留めるっつて……俺はモンスターかよ。

でもアイリスの前であれだけかっこつけた手前だし。

「ここは馬鹿にされ続けてきた冒険者クラスの長所を見せつけてやるか。」

「いつまでも俺の手札がステイールだけだと思ふなよ」

「なに？」

「行くぜ、【擬態】」

「【消えた!?!】」

「バカなつ、ここまで近距離となれば擬態は体が透けて見える程度のはず!?!」

擬態は文字通り周囲の景色と一体化するスキル。

通常は弓兵の特殊スキル。

本来なら姿が見えづらくなる程度で遠距離戦向きスキルだが盗賊の特殊スキル【隠密】と組み合わせることにより昼間の近接戦においても絶大な効果をもたらす。

なおこれは温泉に行った時に備えて、覗きのためだけに開発したコンボで、今度はずひ実践で試してみたいと思って……。

「むっ、こつちから邪な気配が」

クレアの剣は余裕ぶっこいてた俺の頭の上を掠めていった。

……なんでき。

「お前見えてないくせになんで俺の居場所がわかるんだよ」

「貴様の位置くらい目を閉じてもわかるわ。たとえ隠れようともダステイネス卿から



近接にさえ持ち込めばお前はゴミだということは聞いている」

あの野郎帰ったらバインドで吊るしてやる。

続けざまに、今度は確実に俺のいる位置へ剣を振ってくる。

今度はそれを刀で受け止めるが、流石に冒険者のステータスでは必然的に力で押し負ける。

「これでもう逃げることはできんぞ、ここまでだサトウカズマ、私の勝ちだアバババ  
!!」

どういうわけか、攻め続けているはずのクレアが逆に苦しみだした。

「一体いつどこで俺が近接で弱いなんて言った？」

「き……さま……一体何をしたっ!？」

「簡単なことだよ、【エンチャントウエポン】」

中級以下の魔法を使用してその効果を武器に付与する。

武道家の特殊スキル【蓄積《チャージ》】の応用。

本来は放出するだけの魔法もこれにより形あるものにより属性と威力を留めることが出来る。

「ちなみに今回使ったのは【ライトニング】。金属器同士の戦闘ならこれを食らった相

手はもれなく感電するってわけだ」

「おい、あのチビすけ見たこともねえ技を使ってやがるぞ」

「金髪の姉ちゃんも負けんなよー」

「はいはいー、現在小僧が四倍で相手の姉さんが二倍だよー」

異国人同士の決闘ということもありかなりの数の観客が集まつてるみたいだ。

「ほらどうした、さつきまでの勢いはどこに行つたんだ、これならまだダクネスの方がマシだな」

調子に乗って散々煽っていると。

「……もう止めだ」

するとクレアは持っていた剣を地面に置いた。

「まさか降参ってわけじゃないよな、でも降参ならまずは土下座をしてごめんなさいカズマ様と言ってから……」

突然、言葉攻めにしびれを切らしたのか、白スーツは俺の元まで疾走、そして持って来たちゅんちゅん丸を弾き飛ばした。

「どうだ、武器がなくては何も出来だろう？ ああっ!?! くっ、これがダステイネス卿の言っていたドレインタッチか……だが、私の魔力が尽きる前に貴様を葬ればいいだけ

のこことだ」

……言つとくけど、一応これ試合だからな。

貴族としての誇りはどこに行つたのか、まるで切れたときのダクネスのように俺を組み伏せようとする。

てかどんだだけアイツに俺の個人情報漏らしてんだよダクネスのやつ。

「くそつ、どんだけ馬鹿力なんだ」

おまけに組まれた瞬間からドレインタッチを発動させてるのに聞いている気配が一向にない、大貴族つてのは皆魔族並みのタフネスなのか!?

つていうかこのままだとマジでヤバい。

「もうお終いか、どんどん力が弱くなっているぞ? ふふつ、これに勝てばアイリス様

も私のことを……」

もう……そろそろ限……界。

「アイリス様、見ていてくれますか? 今すぐ私がこのケダモノを土に還して一

」

「負けないでくださいお兄様ー!!」

「……………」

……………ん?



そんなことを冗談半分で呟いた。

しかも俺以外せいぜい隣にいるクレアに聞こえるくらいの音量で。

その直後、何かが俺の【敵感知】に反応した。

慌ててその方向を見ると、そこにはむすつとした表情のアイリスが立っていた。

「…………お兄様」

…………おつぷ。

「…………あの…………アイリスさん？」

「…………他の女の人にはいいよるのはダメですよ」

「じよ、冗談だつて、本気にするなよ。俺の経験では貴族は基本的に変態だからいらな

いよ」

俺が必死に弁解をしていると。

「おい、勝手に私を変態どもの一員にするな」

倒れていたクレアがようやく意識を取り直したようだった。

それより…………貴族が変態だつてことは認めてるんだな。

「アイリス様、お見苦しいところをお見せしてしまい、申し訳ありませんでした」

「そんなことありません、貴女もかつこよかったですよクレア」

「…………もつたいなきお言葉です」

「しかし、お兄様は次から次へと見たことのない技ばかりを使いますね」

「冒険者のジヨブだからこそできる事も沢山あるんだよ」

「決着には納得できないがとりあえず貴様の応用力だけは認めてやろう、今度騎士団への冒険者の募集も実施してみようか検討したいと思ったほどだ」

応用力だけというところは気にくわないがとりあえず褒めてくれてるみたいだな。

「はいはいありがとな、とりあえず決着はついた事だしこれのせいでもう大して時間はないけど観光してみるか」

「そうですね」

「仕方ない、アイリス様におかしなことは吹き込むなよ」

「へいへい、じゃあ行くぞ」

「そののあんた、ちよつと待ってくれ」

突然背後から大声で誰かから話しかけられた。

「俺たちのことか？」

「そうだ、あんたに頼みたいことがある」

あんたというのはどうやら俺のことを指しているらしい。

声の主はいかにも武闘派な体つきをした俺よりもやや年上くらいの青年。

ちなみに……イケメンだ。

「俺に何か用か？」

イケメンというだけで無愛想な返事になる。

「そんなに警戒するなよ。それで頼みたいことってのは……俺とも決闘をしないか？」

「遠慮させていただきます」

……これだから脳筋国家は。

???

……結局、決闘は受けることになった。

理由は俺が了承するまでアイツが散々追いかけてくるから。

「……はあ、めんどくさ」

「悪いな、俺の勝手な我が儘を聞いてもらって」

「……自覚してんのかよ。ただし、俺が勝ったらこの後の観光は全部お前の奢りだからな、忘れんなよ」

「ああ、分かった、判定はどっちかがリングから落ちて地面に足をつくか、戦闘不能になるかでいいか？」

「おーけー、それでいいぞ」

「そういえば、決闘の時は互いに名乗りをあげることになっているんだったな、一応名乗っておくぜ、俺の名はグレイだ」

「ご丁寧にどうも、冒険者をやっているサトウカズマってもんだ」

正直、連戦のせいでかなりきつい。

「ただ俺を好きって言うてくれてる女が見てる前でくらい意地を張りたいが男ってもんだ。」

「よし、じゃあ勝負開始だ！」



「……あちらの使い手の方をどう見ますかレイン」

「はい、確かな強者ということはわかりませんが……どこか、底が知れないというような気配を感じます……イケメンですし」

「やはりそうですか、かつこよさでは間違いなくお兄様が上ですが果たしてどうなるか……」

「……………」

???

……戦闘が始まってから一体何合打ち合ったのだろう。

度重なる攻防によりお互いの体は既にボロボロ……。

しかし最後の一撃を決めるまで両者の意思は折れることはない。

「もう十分です、早く試合を止めてください！これ以上は……」

外からアイリスの悲痛な声も聞こえる。

「……ただど逃げの訳にはいかない。」

「なぜかは分からないが、ここで引き下がれば致命的な敗北に繋がる予感がした。」

「……そろそろ決着をつけるか」

「そうだなお互いに全力で剣を振るえるのはせいぜいあと一回」

「これで最後だ！」

「はあああああ!!」

観衆のとらえることができたのは剣の一閃のみ。

そして僅かな静寂……。

「見事……」

片者が力無く倒れた。

「……まだまだ俺も未熟者だな」

そう呟きながら俺はリングを降りた。

「……という激闘だったぞ」

「ほぼねつ造じゃねえか!!」

## 激闘？

「おいおい、何か文句があるなら聞こうじゃないか」

「文句しかないわ、貴様が勝ったという事以外全部デタラメだろうが」

「おっと、妙な言いがかりはやめてもらおうか、確かに所々脳内美化したところはあつたかも知れないが勝ったという事実さえあれば中身なんて自然とついてからもんなんだよ、勝てば官軍さ」

「ドヤ顔でいい事言つたみたいな風に言っているがほとんど屁理屈に聞こえるぞ」

「お兄様、先ほどの試合では一体どのようなようにして勝利なされたのですか？」

「そうだな、アイリスにも分かりやすくもう少し細かく説明するとだな――――」

まず試合開始と共に即潜伏と擬態のチキンプレー。

あんなのと肉弾戦なんてやろうもんなら一撃で仕留められる自信があるからな。

そして見えないところからチクチクと魔法で攻撃をしてたんだがどういうわけかコイツには一切のダメージが入らなかった。

「なんだこの蚊の刺すような攻撃は？ 特別に教えてやるが俺に魔法の類は無意味だ」

そんなんありかよ、もうチートだろ。

だったら後ろから物理で殴れば……。

「……そこかつ！」

「ぐあつ！」

攻撃の為に潜伏を解除した瞬間に位置がバレて剣で弾き飛ばされた。

「クソ、剣術はベルディア並みか」

「気配がダダ漏れだ、気づかないとも思ったか？」

……おいおい、強すぎるだろ。

「おいあんた、ただの一般ピーポーじゃないだろ」

「なあにただのしががない武人だ。言いたいことはそれだけか？ ここはリングの端、

もはや逃げ道はないぞ」

「適当なこと言いやがって、【クリエイトウォーター】！」

「なんだ、ふざけてるのか？」

「こちとら大真面目だよ、【フレイム】」

さつきクリエイトウォーターで出した水と反応してリング全体が霧で包まれた。

「俺に魔法が通用しないことは散々言つたはずだが、これで終いだ！」

「ここだ、「フリーズ」、かはっ！」

剣を持つていない方の手が俺を捉え、体ごとリング外に弾き飛ばしていった。

グレイは完全に勝利を確信して愉悅に浸つた……ある事に気付くまでは。

やがて霧は晴れリングが見えるようになる……。

「見ろ、二人揃つて場外に出ちまつてるぞ!」

「なにつ!?!ここはさつきまで奴が立っていた場所のはず……」

「おうおう、ようやく気づいたか?」

「一体何をした!」

「色々省略するとお前に幻影を見せた」

「バカなつ、俺に魔法は効かないはず……まさか」

「そのまさかだよ、お前自身には魔法が無効化されるなら周りの環境を変化させればいいんだ」

「だが、精神系の魔法を使わずにどうやって幻術を見せた!」

「言つても分かんないだろうけど「蜃気楼」つてやつだ」

「蜃気楼……だと?」

「ああ、まず水を急激に熱し霧を発生させる。そして次にそれを急速に氷結する事

により周囲との空気の密度に不自然な差を作り出す。それによって光が屈折して蜃気楼は完成するわけだ」

「なるほど……何を言っているのか全くわからん。つまりは妖術を使うということだな」

「まあ、科学の力だけどそういうことでいいよ」

「しかし純粋な力ではないにせよ、勝負で勝つことができなかつたのはこれが人生で初めてだ。引き分けだがな、次は必ず俺が勝たせてもらうぞ」

そう言いながらグレンは満足そうな顔で手を差し伸べてきた。

「……はああ？お前何言ってるんだ、俺の足もとをよく見て見ろよ」

「足もと？それがどうかした……どの……っ!？」

グレイがカズマの足もとを見てみると、カズマの足は地面から離れて宙に浮いていた。

「おっ、お前……今度は何を……」

グレンは驚きのあまり口をパクパクさせながら聞いてくる。

「『フライ《飛行》』、ま、俺の魔力じゃせいぜい少し浮くのが限界だけだな」

「そっ……」

「そっ？」

「そんなんチートだろー！ー！ー！ー！！！！」

「……というのが少し細かい説明だ、分かったか？」

「ふむ、なるほど……なわけあるかー！」

クレアのツツコミと共にまたもや一発食らう。

「いつてえな、いちいち俺を殴らないと意思疎通ができないのか」

「殴りたくもなるわ、さつき貴様が話してた内容と一致するところが勝敗しか見当  
ないからな」

「うるせえ、俺だって勇者みたいにたち振る舞いたいんだよ。実際はアレでもせめ  
て話の中でくらしいはなってもバチは当たらないだろ」

俺たちが先の見えない言い争いをしてしていると。

「はっはっはっはっ、喧嘩するほど仲がいいというがそろそろやめとけよ」

豪快な笑い声でグレンが仲裁してくれた。

「仲良くない!!」



「そうか？　まあいいが、ところでカズマ、お前は本当に面白いやつだな。一見無力に見えるがそのうち妖術の使い手とは」

「そんな大層なもんじゃない、力が無いからその分機転で補ってるだけだよ」

「それは違う、知恵も立派な力だ。俺自身が今日それを身に染みて感じたよ」

「そりやありがとな」

決闘の後、俺とグレンはすっかり意気投合していた。

「謙遜するなよ、おっと忘れるところだった。俺はお前達にこの後奢らないといけないんだっけか？」

「忘れんなよ、お前には俺たちの財布……いや、金がないから勝負師？」

「まあ小さい事は気にするな。ところで、ここで悲しいニュースなんだが……」

「何かあるのか？」

「それがな、俺はこの後すぐに戻らなくちゃならない用事があるんだ」

「えっ、はあ？　じゃあなんで俺とあんな賭けをしたんだよ」

「いやいや、万一にも負ける事はないだろうな〜と思っていたからな……」

「おまえな、もう少し自分の言葉に責任を持てよ……」

「すまんすまん、代わりと言ってはなんだが今度会った時は必ずお前の助けになろ

う」

「今度会う時っていつてもなあ、あと数日もすればこの国もでくし……」  
「では、またなー」

「切り替え早！……まったく変な奴に会っちゃまったな、いい奴だったけど」

「彼の方とお兄様はきつと親友になれそうな気がします」

「おっ、気があうなアイリス、実は俺もちよつとそう思ってたところだ」

「ふふつ、お兄様の性格はおおよそ分かってますから」

「あのつ、アイリス様」

「なんですかクレア？」

「その……レインが言っていた集合時間が迫っております」

「そう……ですか、時間が経つのは早いですね」

「ごめんな、観光にもぜんぜん行かせてやらなくて」

「いいんですよ、私はこれからも見る機会が沢山ありますから。それより最後にお兄様の勇姿が見れて良かったです」

最後という言葉聞いて胸が締め付けられる。

「……アイリス」

「では行きましようか……あ、あの、お兄様？　なんだか急に不安になってきたので

……その、手を繋いでくれませんか？」

そう言って差し出してきた綺麗な手は僅かに震えていた。

「……しっかり握っているよ」

そしてクレアの見守る中、俺たちは道中であまり喋らず集合場所に向かった。

## リメンバーミー

闘技場から再び城門前に戻ると、先程とは打って変わりガルガンダの兵たちが大勢いた。

そしてその中央には、周りの武骨な者達とは一風変わった司祭のような格好の男が立っている。

「はあつ、はあつ、お、遅れて申し訳ありません」

「いえいえ、若者らしく元気で良いと思いますよ。それに、元はといえばこちら側の勝手が原因ですしお気になさらなくて結構ですよ」

柔らかな笑みで男はそう返す。

七十……いや、初老くらいだろうか。

「ありがとうございます。……ところで、話では約束は正午と聞いていたのですが、何かあったのですか？」

「はっはっはっは、申し訳ない、お恥ずかしいことに式に必要な祭具の準備が滞っております、正午では間に合わなかったのですよ」

「それはどのようなもののですか？」

不思議半分にアイリスが尋ねると。

「なあに、アイリス様も直にわかりますよ……ええ、直にね……ん？　なんだ今の含みのある言い方。」

「申し遅れましたが私はこの国の宰相、ランターク……おや？　こちらの少年は？」

「この方は私のお兄様です」

お姫様のあり得ない発言に周囲がザワツとする。

「ア、アイリス様、公の場で流石にそれは」

「ご紹介にあずかりました、アイリスの兄のカズマです。以後よろしく」

「ええっ！　姫様の兄君はジャティス様と聞いていたはずですが……」

突然の告白に驚きを隠しきれない宰相。

「いいえっ、俺こそが真の第一王子にしてその他もろもろの事情によつて隠されていたアイリスの本当の兄!!」

またしてもあり得ない発言にいいよこっちの護衛兵達ですら困惑し始めた。

「なん……だと、ではあなたがベルゼルグの……」

「そのとおり!!　次期王だ!!　者ども、王を前にして頭が高いぞ！　ひかえおろー」

「「「ははー!!」」」」

皆思つてたよりノリがいいな。

なんか楽しくなっちゃったけど、このままなっちゃおうかな。

「つって、んなわけあるかー!!」

「ドウブワツ!」

謎の空気の中いち早く我に返った二人の貴族のドロップキックが全弾命中し、カズマさん現在空中遊泳中。

そのまま10メートルほどフっ飛ばされた。

「本っ当にうちのバカが申し訳ない!」

大貴族二人が課長に怒鳴られてペコペコ謝る平社員のようになっている。

「ええっ!? まったく関係ない? それなら良いのですが。それでは彼は一体?」

「ふっ、我こそは、あの邪悪な魔王を討ち倒しこの世に平和をもたらした勇者!」

「お前はもう黙ってる!!」

「ドウゲフツ!」

今度はダブルリアット……ガフツ。

「ええ、今度は騙されませんよ」

「あつ、それは本当です」

「ええ————つ!!」

「…つまり、この方がかの魔王を討ちとった英雄カズマ殿、で間違いありませんかな？」

「そうです」

「なるほど、道理でさつきからただものならぬ雰囲気を纏った青年だと思っていましてよ」

いや、あんた途中まで俺の存在すら気にしてなかっただろう。

さっきのことといい、なんかきな臭いなこの宰相。

「おや、私の行動に不備でもありましたかな、英雄殿」

表面上は温和な表情を保ちながらも、またもや俺の疑惑に敏感に反応してくる。

「じゃあ、単刀直入に聞くけど…魔王軍とつながってたりしない？」

「はあ？」

全員が今度こそ「コイツ何言ってるんだ？」的な視線を送ってくる。

「いやね、ある国では宰相が魔物だったりするし、領主が悪魔だったりするからさ。さつきからなんかきな臭いんだよね、あんた」

「お、お兄様!? 流石にそれは…」

俺の余りにも不躰ないように宰相もプルプルしている。

おっと、今にも殺してやる的な目ですね。

「おいカズマ、いい加減にしろ。どうしたというんだ一体、お前はこの国に戦争でも吹っ掛けるつもりか？」

「違うんだよ、さつきから見えてなんかこのおっさん怪しいんだよ。きつと裏で何かを」

「【スリープ】」

ガクッ

「本当に本当にうちのバカが失礼しました」

「え、ええ、そうですか。いやはや、流石英雄殿の考えることは凡才の身たる私では理解できませんよ」

冷や汗を流しながら先ほどまでの殺気を引っ込めて再び宰相は温和な雰囲気に戻った。

「ちよつと待つてもらおうか、私のカズマに何してくれるんですか？」

「め、めぐみん？ 落ち着こう、取りあえず落ち着かないか？」

ダクネスの説得も柳に風、紅魔族特有の紅い目が爛々と輝いている。

間違いないアレをやろうとしている。



「戦争か？ ならば受けてたとう。我が名はめぐみん！ 紅魔族一の魔法使いにしてこの国を滅ぼすもの！ 我が魔道の力を見るがいい、【エクスプロー】」

「【スリープ】」

ガクツ

「よし、ナイスだレイン。こちらも失礼した。もうさつさと始めましょう宰相殿」

「そ、そうですね」

亡国の危機をさも小事のようにさらっと流すクレア。

仕方ないのだ、だってもう謝り疲れたし。

「では…これよりベルゼルグ第一王女アイリス様の受け渡しを！」

大音量の音楽…ではなく、歓声が鳴り響く。

「ふう、では行きますか…」

スリープを食らって未だに睡眠中のカズマを膝枕しながらアイリスは呟く。

「最後の最後で眠ってしまったているなんて、あなたらしいといえばあなたらしいですけどね。…でも、こういうときは「行かないでくれ」とか言ってくれるものなんですよ勇者様」

でも大丈夫、だって約束してくれたから…。

「いつまでも、いつまでもあなたのご返事を待ち続けています」

最後に、少年が旅の途中からさりげなく身に着けていたあの指輪と彼がくれた指輪を見つめて…。

「さようなら…」

ほどなくして王女の受け渡しは滞りなく進行し一行は城の中に消えていった。

「これで儀は完了です。あとは明日の縁定の儀をもってベルゼルグとガルガンダの同盟は完全に締結されます」

ようやく一仕事終えたといった様子の宰相。

「そうですか、では明日はどこで挙式をあげるのですか？」

「あなた方がそれについて知る必要はありませんよ」

「なんだと!?! それはどういふことだ宰相殿」

両国の高級士官が揃わずして結ばれる同盟などあろうものか。

今度はあちら側からの突拍子のない返答に驚きを隠せないダクネスとクレア。

「別に貴殿らを排そうとしてゐるのではない。我が国において縁定の儀とは決して外部の者にはさらすことのできぬ秘伝の儀。それ故に同盟だからといっておいそれと儀への参列を許可するわけにはいかなのだ。無礼を承知だとは思ふがここはひとつ了承してもらいたい。お詫びというわけではないが我が国で一番の宿を手配してある、そこで今回の疲れをとるといい」

「いや、そういうわけではなくてはだな」

なおもなかなか引き下がらないクレアに対し宰相は顔を渋らせながら。

「まあ、無理には言わんよ。ただし、同盟がどうなつてもよいのならばな」

さつきまでの温和な雰囲気はどこに行つたのかと思わせるほど、どこか剣呑な態度に宰相は一変する。

「ぐぬっ」

さすがクレアも同盟の事を出されると出るに切れなくなつてしまふ。

「我らを脅してゐるのですか？」

「脅すだなんてとんでもない、ただ理解してほしいとお願いしているだけだよ。それで、返答はいいかがかな？」

「ぐっ…：了解した」

クレアの返事に満足したのか再びにこやかな笑みで。

「そうですね、理解が早くて助かります。使いの者が皆さんを宿までお送りするので、それでは」

そう言つて宰相自身も城の中にさつきと引つ込んでしまった。

「……どう思うダステイネス卿」

道中でふとクレアはダクネスに尋ねる。

「どう……とは？」

「決まっている。相手方のあの対応についてだ。いくら何でも横暴すぎるといふものだろう」

「そうだな、なにもなければよいのだが……」

そんな二人の杞憂は残念ながら杞憂に終わることにならないのを、このときの二人に知るすべはなかった。

## 真夜中を超えて：

一方そのころアイリスは……。

「遠路はるばるご苦労様でした、アイリス様。これより御御身はいずれ我らが王妃となる身。我ら下身の者は皆、貴方の手駒だと思い、遠慮なく何なりとお申し付け下され」  
「手駒だなんてそんな、そこまで気を使わなくても結構ですよ」

先ほどの宰相と同じような神官風な使い達に王との謁見を兼ねた夕食を終え、自室へと案内されていた。

武骨な外装とは一変、豪華絢爛な内装にさすがのアイリスも驚きを隠せない。場内は見渡す限り金でできた美しい装飾物がちりばめられ、壮麗さすら感じる。まさにここは、さながら場外から切り離された異界のようであった。

「それにしても…何というか、中は随分と外とは気色が違うんですね」

それを聞くと、アイリスの質問を待っていましたといわんばかりに横にいた使いの男は。

「そうでしょう、そうでしょう。この国の国風を見た後では少々驚きになられるかと思いますが、あれらは全て下賤の者。高貴な身たる貴族や王族たちはこの城内で常に高い精神をもって日々の政務をなさっています。なので、アイリス様もベルゼルグにいたところのように不自由をする心配はないですよ」

おそらく本気で言っているのだろう。そのことに疑問を持つわけではないが自国の民草を下賤と貶めるのは国を治める上の者としてどうなのかとは思う。

「そうですか、ここでは快適に過ごせそうですね」

「アイリス様にそう言っていただけならきつと王もお喜びになられるはずですよ」  
アイリスの返答に満足したように男ははにかむ。

「つと、ここが今後、アイリス様のお部屋となります。なにか不都合があれば何なりと。では」

「ありがとうございます……はあ」

ピンツと張った糸のように強めていた緊張と警戒がほどけ、壁にもたれかかる。

案内してくれた者達…一見温和な会話をしてくるようでその会話の中ではベルゼルグの機密を巧みに聞き出そうとしていた。

夕食の間のピリピリとした空気といい、王妃からの嫌な視線といい。

「これは、気を抜いている間はなさそうですね」

この様子から察するにガルガンダはかなり表面上の同盟を構築しようとしているようだ。さしずめ自分は人質といったところだろうか。

大抵のものに実力で負けるとは思っていないが、この国は姿こそ謁見では見ることはできなかったけれども『彼』がいる。

「……困りましたね」

一通りの状況確認を済ませたあとあまりの問題の多さに、心が重くなる。

……とりあえず悩んでも仕方がない。今日は疲れたからもうサツと湯あみをして寝よう。

「お兄様が言っていました。《明日の事は、明日になってから、考えよう》って」

さっき別れたばかりのあの人の事を思い出して幾分か和みながら寂しさも感じてしまうのは仕方ないだろう。

自分のスタイルについて何かと悶々としながら湯あみを済ませると、急にドアをノックする音が聞こえた。時刻はもう随分と遅いが一体誰だろうか。

「……どなたですか？」

若干緊張気味にアイリスが尋ねると。

「宰相のランタークでございます。夜分遅くとは存じますが婚約者であるグレン様をお連れしました」

……えっ。

「ではグレン様、私はこれで…お楽しみくださいませ」  
そう言つて足音が一つ遠ざかっていく。

「では、入るぞ」

返事待たずにもう一つの声が扉を開けてくる。

向かい側の窓から入る月光によつてできた自分の陰で王子の顔はよく見えない。

「……ん？」

グレイは一瞬、何かに気づいたように首をかしげたが、すぐに口を開き。

「お前がベルゼルグの王女アイリスか。ふむ、うわさに聞くだけはある。まだ幼いが顔立ちも整っているではないか」

その瞬間、アイリスはこの後自身がたどるであろう運命を察してしまった。

きつと抵抗することも許されずに自らの女を奪われるのであろう、ということ…。

「……今回は…こちら側の同盟に応じてくださってありがとうございました」

震える声で応じる。理性では分かつていても本心が分かるうとするのを必死に拒む。

「怖いのか？」



おびえた様子のアイリスを見て愉しんでいるのだろうか、グレンは尋ねてくる。

「い…いえ、そ…その、初めて…なので緊張してしまつて…」

本当なら今すぐにでも逃げ出したい。年相応な少女のように泣きながら許しを請いたい。

だが、王族としての責務がそれを許さない。たとえ薄氷のような同盟だろうとも愛する母国にはそれでさえ必要なのだから。

「なあに、最初は誰しも怖がるが、そのうち楽しくなるもんだ。…よつと」

「きやあつ!」

近づいてきたグレンにホールドされアイリスは難なくベッドに押し倒されてしまう。

いよいよ本当に奪われてしまうのだろう。無理だろうとは思っていたが初めてはあの人が良かった…。

遂には耐えきれなくなり純白の頬を一雫の涙がつたう。

その様子にグレイは満足…：ではなく急にオロオロし始めた。

「ええつ!?! やべつ、やり過ぎたか。お、おい、しつかりしろよ」

そつちから泣かせておいて一体何を言っているのやら。すつかり錯乱状態のアイリスの瞳から涙は止まらない。

「俺だよ俺、あの時あつた俺だつて」

今度はオレオレ言い始めた。お兄様が言っていた巷で噂の《オレオレ詐欺》だろうか。  
「ほらっ、闘技場であつただろう？ あの時の…えーとなんて名乗ってつたけなあ。  
…そうだ!! グレイだ!」

「えっ…あの時の?」

月の逆光で見えなかつた顔をよくよく見てみるとそこには見知つた顔が。

「いやあ、部屋に入った時から気づいてはいたんだがなんか緊張してたからよ。  
ちよつと和らげてやろうと一芝居うつてみたんだが…:…なんか、悪いな」

ほう、つまりコイツは冗談半分で私の初めてを奪おうと? なかなか笑わせてくれるではないですか。

「で、でもな、あくまで冗談であつて別に最後までしようとは思つてなかつたからな」  
「なに…:とは」

「そりゃあ、なにつてナ」

「【エクステリオン】」

部屋を傷つけないギリギリの範囲で必殺の意で放つ。

「つてうおおおお!!? いやちよつと待て! 確かに俺が悪かつた、少し悪乗りし過ぎた」

「そうですか…:【エクステリオン】」

次度、滅殺の意で放つ。

「ああああああああ!! お願い止めて! 今、無効化の魔道具つけてないから!」

そうか…ならば都合がいい。

「貴方がいなければ婚約も破棄できますしね…〔セイクリッドⅡエクスプロード〕!」  
乙女を汚すものこれ何人たりとも許すまじ。

「ぎゃああああああああ!!」

終わってみればスツキリとした顔で満足そうな少女とプスプスと煙が立って焦げている王子という誰が見ても淫らな行為の後だとは思えないような光景…というより惨劇があった。

「それで? 何のためにここに来たんですかあなた」

すでに屍のようになってるグレンをアンデットを見るような目でアイリスは呟く。

「い、いや、俺は行きたくないって言ったんだけど大臣たちがうるさくてな。仕方なく来ただけなんだよ。もっ、もう一度言うが淫らなことは一切しようとは思ってなかったからな」

もういつそ最初の威圧が嘘のように…みじめさすら感じるグレンにさすがのアイリスも気を収めて。

「はあ、分かりました。こちらもそれなりに無礼を働いてしまいましたからね。今回

は互いに忘れましょう」

ようやく許しを得て安堵するグレン。

「了解だ……ところで、大臣にああいった手前すぐに部屋を出ると怪しまれるだろうし、今夜はソファアでも貸してくれないか？ 話は明日適当に合わせておく」

「……仕方ありませんね。でも、少しでも邪な気配を感じたら討ちますからね」  
もはや、貴方は敵です感を微塵も隠さないアイリス。

まあ、状況的にグレンが120パーセント悪いので、自業自得なのだが…。

「分かった分かった。これ以上言われないうちにさっさと寝ますよおやすみ」  
そう言つて数秒もたたないうちにグレンは寝てしまった。

前会つた時といいさつきといい、おそらく根は実直なのだろう。…頭は弱いようだが。

「もう…私の体はお兄様のものなんですよ…って、何を言っているんですか私は」  
おそらくさつききの事でまだ気が動転しているのだろう、そうに違いない。

「…お手洗いに」

すっかり夜になり昼間の煌びやかさは身をひそめ暗闇に支配された場内に、アイリスはどこか不気味さのようなものを感じていた。

「うう、こわくないです、こわくないです」

ポツポツと自らに言い聞かせるように唱える。

周りを見渡しても警備兵一人として見当たらず――

「どうかなされましたかな、アイリス様」

「ひゃあつ！」

突然の背後からの問いかけに突拍子もない声をあげてしまう。

「い、いつからそこに!?!」

すると、男はニタアツと嗤い。

「ず——つとあなたの後ろにいましたよ」

シュツ!

「えっ?」

ドスツ!

「ゴホツ…なん、で」

ドサツ

「なに。これからしていただくことは純粹なあなたのままではさぞかしお辛いでしょ

「うから手助けして差し上げるだけですよ」

そうして男…いや、宰相はアイリスを担いで再び闇へと音も無く消えていった…。



「ああ、目が覚めたみたいですね。何やらすべて壊したい的なことを言っていたので、そういう事かと空気を讀んだんですが」

せつかくいい事をしてやろうと思ったのに、的な顔でドヤ顔を決めてくるこの紅魔族にドレインタッチを決めてやりたい。

「いや、どこの星にも爆裂魔法注文するやつなんていねえよ!」

ハアツ……アホなやり取りですっかり忘れてたけど、そういえばスリープをくらって寝らされたのか。

お兄様……。

「つツ……」

……そうだった。

「つ、悪いなめぐみん、ちよつと出かけてくる」

そう言つて装備を手に取り、カズマは外に出ようとするが。

「待つて……ください」

らしくなく、ふるえた声に振り返ると今にも泣き出しそうな顔をしためぐみんが服の裾を引つ張っていた。



「めっ、めぐみん!」

「本当に……行くんですか?」

不思議と 言葉の意味は聞かなくても理解出来た。その一言に多くの意味と感情が込められているのが分かる。

自分のする行動が何を意味しているのか、と。

そして……。

「好きだった……」

「えっ……」

唐突に発された言葉にめぐみんは、意味がわからないと言った顔をした。

「全然言えなかつたけど、めぐみんも、ダクネスにも何回もドキドキさせられて、こんなにダメ人間な俺を好きって言ってくれてすごく嬉しかったんだ」

正直に話そう、それしかできないんだから。

「だから……ありがとう。本当にごめん!!」

時間が少し経ち、頭を上げると。めぐみんは……嬉しそうに泣いていた。

「えっ……めぐみん?」

「そういう所ですよ。本当に仕方ないカズマですね。ズルいですよ、せつかくこっちは問い詰めてやろうとか縛り付けて動けなくするとか、意地悪なことを考えてたのに……」

「ごめん、というかサラつと言った後半のやつがさり気なく怖いんだが」

こっちの不安に、ふふつとめぐみんは笑う。いや、目が笑ってないから本気だよね!?

「冗談ですよ、あーあ。めちゃくちゃ綺麗にフられてしまいました。これでは悪態のひとつも言えないじゃないですか」

ひどいですよ、と無理して笑顔を作つて、今にも泣きだしそうだ。こんなクソみたいなことしか言えない俺にありつたけの罵詈雑言を浴びせたって何一つ文句は言えないのに……なのにくぐみんは……一言も俺を貶すことなく送り出そうとしてくれてた。

「めぐみん……」

「何つらそうな顔してるんですか、いいですよ。振った側がそんな顔するなんて許されてないんですからね。私たちのことはいいですから早く行ってあげてください」

「っ、ごめん。っ!？」

めぐみんを背に俺はそのまま宿を駆け出して行った。

「……私のパートはどうなってるんだ??」

「ああ、ダクネスずっと待ってたんですね。残念ながらダクネスの尺が足りなかったのです私達って言っておいたので許してください」

「めぐみんっ!! 貴様ああ!!」

「ちよっ、取っ組みはするいですよ。ああっ!!」

しばらく走り、城壁の下にまで到着した。

そう、これが俺の答えだ。俺はずっと……答えを出すのが怖かった。それが今の幸せを壊してしまうんじゃないかって。

でも、いつになっても答えを出せない俺にあの子は、何も言わず答えを待って

いてくれた。自分にもう時間が無い時でさえも……。

「……アイリス。今行くからな」

今度こそ、あの子に……いや、彼女に答えを伝えるために。

城に到着すると、そびえ立つ城壁の高さから【狙撃】による侵入は不可能と判断した。アイリスの現在位置は昨日のうちに彼女が肌身離さず身に着けているあの指輪に少し細工をし、発信機のような機能を取り付けておいたので城の最上部にいるというのがわかった。

勘違いしないでほしい、この時は兄としての、いや保護者のような感情であって決してそれ以外の感情はなかったということだ。だから、まるで犯罪者を見るような目で俺を見ないでほしい。心がきれいな青少年代表、カズマさんからのお願いだよ。

【潜伏】を発動しながら、気配を消して城門に向かうと、衛兵はわずか二人……と思っていたら百人ほどがまるで戦争時のごとく陣を組み、ご丁寧に魔力探知の結界まではってネズミ一匹通れない鉄壁の要塞を成し、侵入者を待ち構えていた。

「つて、おーい!! どう見ても、いきなりこれはおかしいだろー!!」  
「ん? なにか声がしなかったか?」

やべつ、あまりの驚きに思わず声が。……にしても、やりすぎだろコレは、絶  
対怪しい。思えばあの宰相、最初から怪しい空気出たもんなあ。

「アイリス……頼むから無事でいてくれよ」

とはいえ、一体どうすりゃいいんだこれ。

……ザー……ザザッ。

「あー、テストス、テストス」

「……ん?」

なんか、道具袋の中から見知った嫌な声が聞こえてくるんだが……。

「あー、こちらバニル、こちらバニル、麗しき少女(笑)を打ち捨てて、ついにロリ  
コンになる決心のついた男が、百人の衛兵に手も足も出さず無様にフルボッコされる未来  
が見えたのぞな」

「……うぜえ」

「おつと、美味な感情なり。そんなお得意様にこの見通す悪魔ことバニル様が、最強ア  
イテムをお主の懐に忍び込ませておいたので、せいぜい上手く使うがよい。今後ともバ  
ニル商店をごひいきに……ではな!」



「いやああああああああああああああああ!!」

チクシヨウ、城門の警備を抜けたところまではよかった。なんで今俺は追われているんだ。俺はただ、城内で見つけた女湯をのぞきに行っただけなのに。

「くつ、何でバレたんだ!! のぞきの計画は完ぺきだったはずなのに! ……なんだ、頭がクラクラするぞ?」

大勢の追っつてから必死に逃げていて気付かなかったが、よく見ると服が真っ赤に染まっている。明らかにヤバイ量の出血だ、攻撃!? どこから?!

「クソツ、鼻血が止まらねえ!!」

「[[[[………]]]]」

「……」

「……お邪魔しました。【潜伏】」

「[[[[ああっ!!]]]]」

「奴はどこに行っただ? 探せー!!」

静かな夜から一変、城内は侵入者探しで喧騒に溢れかえっていた。

「よし、アイリスのところまでもう少しだな」

しかし、全員が城内を探している中、カズマは城の外壁を【狙撃】で登り切り、既に最上階への潜入を完了していた。

「城壁はちと高すぎたが、中に入ってからのはあんまり考えられてなかったみたいだな」

最上階は下階とは。まるで空間が断絶しているかのように、警備の一人もなく、静謐な空間を暗闇が支配していた。

ただ、その静謐は重たい泥のようにねっとり空気を濁し、いかにもヤバそうなおいを醸し出している。

「……いかにもなんか出そうな感じだな」

【潜伏】を発動させながら、最大限の警戒で暗闇を探索しようとする――

「っ!?!」

突如背後に不協和音のような気配を感じ、不意を突かれながらも、すぐに臨戦態勢に入る。しかし、振り返ったその気配の正体は……。



「アイ……リス、なのか？」

「……………」

返答はない。

「おつ、おい、もしかして拗ねてるのか？ ごめんな、俺もその、気持ちを整理していたというかなんというか……」

「……………ちゃん」

「アイリス！ 大丈夫か!？」

これまでの直感がカズマに告げている。ここはヤバいと、迫りくるであろう脅威に一刻も早く退避すべきだと警鐘を鳴らす。

マズい、今すぐアイリスを連れて逃げないと……。

「……………げて」

「えっ——」

こと切れるように出たアイリスの言葉の意味を理解することはできなかつた。言葉の次の瞬間、カズマの体は真つ二つに両断されていた。

「【エクス……テリオン】……」

瞬時に薄れゆく視界の端でカズマが見たのは、少女の頬を伝う一滴の涙と、暗闇の中で不気味に笑う男の姿だった。





## 絶望のその先で

.....

.....ごめん。

本当に、俺はいつも決心するのが遅い。嫌な予感是最初からしていたのに.....。

今となつてはもう遅いが思い返せば、未来の分岐を変えられるタイミングは、いつでも目の前に転がっていたんだ。無理やりにも連れ出せば.....。でも、動けなかった。覚悟が.....足りなかった。

混濁した意識の中、ひたすらに後悔の念のみが心中を渦巻く。そして、自分の身に何が起きたのかを嫌にでも理解した、してしまう。

死んだ.....。

死んでしまった、他ならぬ彼女の手によつて。その事実は想像以上にカズマの精神を蝕んだ。心は容易に壊され、狂気がそつと寄り添い、手ぐすねする。苦しみも悲しみも、霧のように霞み、ぼやけて楽になるから.....と言いたげに。

落ちてしまえば、それはカズマを優しく包み込んでくれるのだろう、思考は止まり、何も……何も……。

「しつかりしてください、カズマさん！」

突如、聞きなれない焦燥した声が、危うく狂気に身投げしかけたカズマを呼び止める。

「ああ……」

気が付くと立っていたのは、いつものあの空間。その中心には、この世界の主である彼女が、少し悲しそうな、寂しそうな表情でこちらを見ていた。

……ああ。

「死んだん……だな」

「……はい」

わかり切った質問だ。聞きたいことはそんなことではない。  
……。

「つ……エリス様！」

「残念ですが、現時点でカズマさんが蘇生することは不可能です」

「っ!？」

こちらの質問はわかっているとあったように、エリスは淡々とカズマに、うすうす予期していた事実を先んじて通告してきた。

考えれば当たり前なことだ、カズマが死んだ地点は城の最上部、めぐみんやダクネスは近くにいない。ましては、蘇生において必須なアクアが不在なのだ。分かっていた、分かっているはずなのに……それでも、もしかしたらと願っていたカズマのエリスへの期待はあっさり切り捨てられてしまった。

蘇生不可。つまり……

「……ダメなのか？」

「……はい」

「なんとかならないのか!？」

最終通告を受けてもなお、駄々をこねる子供のようにカズマは抵抗する。しかし……。

「申し訳ありません、カズマさん。もう一度だけ言いますが、今世におけるカズマさんの生は終了されました。まもなく、リザレクションのリミットも切れますので蘇生は現実的に申し上げて不可能でしょう。残念ではありますが、諦めてください」

「あつ……」

エリスは、慰めるでも、励ますでもなく、事務的に事実だけを述べた。瞬間、カズ

マの視界は灰色に染まり、これまでの冒険のうちにいつのまにか忘れてしまっていた死ぬことへのリスクを、軽んじていた自分の甘さに対する嫌悪感と突如宣告されたゲームオーバーはカズマを絶望に叩き落すには十分すぎた。

必ずかなえると決意した、彼女の笑顔が、ぼんやりと思い描いていた少し胸がくすぐつたくなる二人の将来が、黒く塗りつぶされていく。糸の切れたからくり人形のようにカズマの体からは生気が抜け、崩れ落ちる。

「カズマさん!!」

ん!!

エリスが何か言っているが、カズマの意識にその声は、もう聞こえない。渦巻く絶望の嵐はカズマの意識を飲み込み、狂気の波が再び押し寄せる。

ごめん

そして、意識の手綱をゆっくりと手放した。

チクシヨウ……。

“お前の自業自得だ”

うるさい！ そんなことはわかってる！

“本当にどうしようもない奴だよ、何が英雄？ 何が勇者？ わらえないな”

……………ろ。

“アイリスは今頃どうなっているだろうな”

やめろ……やめてくれ。

なんで………なんでこんなことに………なんで………なんで………なんで………なんで………  
………なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで  
なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで  
でなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで  
ンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナン  
ンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナン  
ンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナン

希望は消え去り、残された後悔という名の絶望はカズマの心を容赦なく食い荒ら



す。すでに理性はなく、ただただ変えることのできない自らの失敗を嘆く。永遠のように……延々と。

苦しい……もう、それだけだ……

どれだけの時間が過ぎたのだろう。

最初に消えたのは理性だった、そこから感情が消え、時間の感覚が消え、ついには一体『なに』に苦しんでいるのかさえ……分からなくなった。

ああ、残っているのもう一つだけあった。

痛い……。

時折感じる胸の痛み。不思議と、この痛みが訪れている間は苦しみが少し和ぐのだ。あたたかく、満たされるような。これが、これがカズマをつなぎとめる最後まで残った欠片。たとえば、サトウカズマ自身のすべてを失くしても切り離せなかったモノ。

“必ず”

擦り切れた記憶が脳裏をよぎるが、よく思い出せない。そう、思い出せない。なぜ

かとても大切なものだという確信だけはあるが、それが『なにか』が思い出せない。そうして答えを見つけ出せないまま、再びあの苦しさが襲ってくる。

だが今まさに、ついにその痛みもカズマの中から消えんとしていた。感じる、種火が弱まりゆつくりと持ちうる熱が消えていく。魂から色が抜け、白く、薄く。

……？

ふと消えゆく直前、手のあたりがキラリと何かが光つたのに目が止まった。

これは……？

そこには指にはめられた特に何の変哲もないシルバリング。そもそもつけていた記憶もないのでずつと気が付かなかつたが、だが……。

っ!?

突如、今までとは比較にならないような痛みが胸に走った。

“だからさ、待っててくれないか”

こと切れた記憶達が沸き立ち、乱れる。

“いつまでもいつまでも、あなたを待ち続けております”

朽ちた感情が色めき再び脈動する。

ああ……ああ……

涙があふれ、慟哭す。

“お兄様……”

「……アイ……リス」

しっかりしろ!!

「アイリス」

忘れていいわけないだろ!!

「アイリス!!」

立て!!

「……今行くぞ、お兄ちゃんが必ず助けるからな」

「——さん、カズマさん!!」

「う………クリス?」

「今そつちじゃないですから、ああ、そうじゃなくて、大丈夫ですか？ 意識を失ったままずっと倒れこんでたんですよ！ 私、こんな事初めてでどうしたらいいのかわからなくて……よかった、カズマさんが死んじやうんじやないかと思って……」

「もう死んじやつてるけどな」

「そういうことじゃありません!!」

「……はあ、とりあえず目が覚めて安心しました」

「心配かけたな」

「本当ですよ、まったく……」

すつかりクリス口調になってしまっているが、そこは仕方ないだろう。エリス曰く、俺はどうやら気を失って、現実時間にして半日ほど昏倒してしまっただけらしい。体感時間と比較すれば微々たるものだったので少しほっとした。

「では気を取り直して……カズマ様、今後の

「ちよつと待ってくれ」

「……なんですか？」

少し怪訝な顔でエリスは不思議そうに聞き返す。

もう少し待っててくれアイリス、必ずお前を救い出す。……たとえば、俺がどうなつたとしても。

せいぜい悪人づらにでもなつてやるさ。

「取引をしよう、エリス」